海洋真時代

vol 1

2015年3月3日号 TRUE OCEAN ERA 300円

運命の年2015年！

1000年に一度の地震津波に耐えうる「東日本復興政策」とは何か

提言 海洋政策13の柱

地方創生は海洋創生「石巻・真の復興を考える」

人間教育としての海洋教育

2015年3月3日発行 年4回発行 創刊号

輝く太平洋を巨文島より望む

韓国全羅南道麗水市よりフェリーで二時間ほど南下。多島海の最南端に巨文島が気高くその美しさを誇っている。季節になると島全体に椿の花が咲きほころぶ。ここから目前に広がる太平洋を望む時、その果てしない広がりに息を呑む。海域は豊富な魚影に恵まれ、日本統治時代には日本人が居住し漁業が盛んに行われた。当時、巨文島の魚は美味で日本では高級魚として珍重された。今は知られていない釣りスポットであるが世界トップクラスの釣り場である。近い将来、世界からあき足らない釣り人達が押し寄せてくるだろう。灯台や神社、日本式の住居が今も残り大切に保存されている。灯台は東洋一だという。イギリスやロシアも戦略的な目的で巨文島を一時実行支配しようとした。イギリス人も静かに巨文島の墓地に眠っている。巨文島は太平洋を拓く人々の基点として、幽玄な絶景、白島・ペクトを東に見ながら、気高く歴史を見守りつつ世界の恒久平和を祈っている。

海洋精神

～ 海の美しさ ～

海には信じられないほど様々な雰囲気が含まれています。静かな海は美しい女性のようです。そして浜辺の砂は眩しいくらいの美しさと平和の絹のようです。しかしそれが海が与えてくれる全てではありません。少し風が吹くと海は踊りはじめます。少しだけです。どのようなバレリーナや踊り子といえども海の踊りとは決して比べようがありません。踊り子は小さな限られた舞台の上で踊るだけですが、海は際限もなく踊るのです。その踊りの舞台には際限がありません。

海では鳥が飛びまわります。飛んできてはまた飛び去り、止まったり羽ばたいたり、すべてが様々に異なる形をして飛びますが、すべて調和がとれています。カモメがやってきて歌を歌い、美しい調和ある動きをします。時々このような美しい光景が、巨大な鯨が水の中から飛び上がってくることによる突然の火山の爆発のような動きによって劇的に変化します。水しぶきが輝き光を反射させます。これも信じられないほどの美しさです。それほど多くの変化と様々な動きがあります。

海が腹を立てる時には、あたかも「誰でも自分の方向に向かって来る者は呑み込んでやるぞ」と言っているかのごとく威厳と力を示します。海はそこに浮かんでいるすべてのものを呑み込むことができるのです。

普通の場合、高速の船は静かな海をあたかも絹のハイウェイのように美しく走ります。しかし、一度波が怒り狂って高波のしぶきを上げる時には、その船も無力となります。波が高まれば、船は「はい、はい」と答えるしかありません。波が突然下に落ちれば、その船もまたそれに従うのみです。なぜならば自然は最も強力であり、海は「あなた方は私の言うことを聞け。ここに私がいる」と言っているからです。このような理由で、海を愛する人は男も女も高慢になったり、傲慢になったりすることができません。そのような自然の圧倒的な力の前で、いかに謙遜になるかを知らなければなりません。

海洋真時代
2015年3月3日号 TRUE OCEAN ERA Vol.1

社説 真航路
荒れ狂う海の向こうに 6

特集
1000年に一度の地震津波に耐えうる
「東日本復興政策」とは何か 10

海洋政策の研究
提言 海洋政策13の柱 14

シリーズ 地方創生 海洋創生
石巻・真の復興を考える 16

世界はひとつ
「圓母平愛友好協会」創設へ向かって出航 20

世界の釣り 日本の釣り
剣崎・横浜・ニューヨーク 22

時事解説
環太平洋時代の到着期に於ける米国と
日韓を中心とする北東アジアの役割 26

ここに人あり
山崎祐介「人間教育としての海洋教育」 28

歴史の光
政宗と常長とサン・ファン・バウティスタ号 32

海水のお話
人の体は海水で包まれている 34

社説 EDITORIAL ARTICLE

真航路 荒れ狂う海の向こうに

佐藤 健雄

想定外を克服する能力を培う海

以前１９８０年代から90年代にかけて私はボストン湾でマグロ釣りに挑戦していました。朝3時頃、まだ暗いうちに出航するのが常でした。湾を出る時、ブレークウォーター（防波堤）の間を28フィートのボートで通過する時いつも体験することは、「暗い海の向こうから恐竜が襲いかかってくる」ように、荒波が正面からボートに向かってくることでした。その荒波が最初の「肝だめし」でした。この時落ち着いて船の向かう進路が狂わないようにボートを操舵してこの段階をまず通過することが、マグロを釣るための第一の関門でした。荒波を越えてこそ初めてマグロに出会い、マグロを釣ることができる可能性が出てきます。荒波を越えた時、新しい闘いの次元に登ることができるのです。

荒波に慣れてくると、誰もが平然と何の違和感もなく当然のように海に出ていくことができるようになります。東日本大震災の時、幾重にも重なる防潮堤の間でヒラメの刺し網漁をやっていた私の友人が大津波に襲われましたが、その時彼は大津波から逃げるのではなく波に向かって船を走らせ、三つの波の山を越えて生命が助かりました。海は私たちに多くの試練を与え厳しい訓練をします。海で生命を落した人々もいます。しかしその壊滅的とも言えるダメージを与える荒波の試練を越えた時、いつも思うのです。「あの荒波があったからこそ、今の平安がもっと深く味わえるのだ」と。海は本当に多くの事を教えてくれます。海の宿命である荒波を越える力が私たちになければ、海の恵みは味わえず本当の平安を得ることができないのです。

すなわち自分の価値観を超える価値観を受け入れる謙虚さと能力、賢明さを常に持ち合わせることが必要です。私たちは不覚にも想定内での生活をすることが多く、想定外の出来事に対応する能力に乏しいものです。いくら開拓魂を極める闘いをしたとしても、想定内での闘いには限度があります。大自然は実に想定外で満ちています。その大自然の中で生きる時、未知と調和する能力や想定外を素早く理解し消化する能力が必要です。この想定外を消化し調和する能力を陶冶するところ、それがまさしく「海」なのです。

私が体験したアラスカの海は変化しやすい海でした。霧が立ち風が吹きます。潮の流れも異常なほど強く流れます。今の瞬間、平穏であるかと思えば、突然、想像を超える荒天に変化します。全ての生命はそのような海から生まれ、人にとっても海は生命のふるさとです。海での生活をして初めて人は人らしくなり、人知を超えた想定外の大自然や環境や出来事を理解し克服し、主管することができるようになります。海で生活することを基礎に予知能力を啓発し未来に備えなければ、私たちは豊かな大自然を、創造的に活用しエンジョイする事は出来ません。海での生活をする人は創造的に豊かに生きることが出来るようになるでしょう。

世界的な海洋時代が開かれる

１９４５年８月、世界大戦が終結し国際連合が創設されると共に、人々は「海をどのように誰が管理するか」について討議するようになりました。１９８６年、米国はいち早く２００海里宣言を行い、海の管理に乗り出しました。沿岸の土地や水域の浄化を行うとともに２００海里を管理できるボート造りに力を入れ始めました。人々の意識も海に注がれるようになり、遂に１９９４年、国際海洋法が国連によって整備されました。それによって世界的な海洋時代が開かれたのです。

１９８６年、米国に渡った私は海洋事業に携わ

り、それがきっかけとなり各地で釣りを行いました。アラスカではキングサーモンやシルバーサーモン、ボストンではジャンボマグロ、ニューヨークではストライプドバスやヒラメ、フロリダではバショウカジキ、ハワイではブルーマリンなど大小様々な魚を釣りました。オーストラリアや南米の大湿原パンタナールにも足を伸ばし、パラグアイ河でドラドも釣りあげました。海や河での釣りに専念した私は、海に関する「米国の驚くべき大きな変化」をそこで体験することになります。

私の米国での釣りの拠点はニューヨーク湾でした。ニューヨーク湾は本当に広大です。ニューヨーク州とニュージャージー州の陸地が直角に出会い、海を包みこむようにハドソン湾を形づくっています。ニューヨークバイトとも呼ばれ円型の4分の1の形をした広大な湾です。この湾にハドソン河が流れ込み、ニューヨーク湾の先端160海里沖（約250km）にはハドソンキャニオン（峡谷）があります。そこにはマグロやカジキなど南から北上するメキシコ湾暖流に乗ってくる豊富な魚たちがいます。ジャンボマグロもよく釣れ、私は100kgサイズのマグロを1回のトリップで17本釣ったこともあります。そのくらい魚が豊富でした。

1990年、私は心に期することがありニューヨーク湾で釣りを始めました。マンハッタン島の対岸、自由の女神像で有名なリバティー島の近くに釣りのための拠点をつくり、真冬の1月1日から40日間、毎日7時間以上釣りをするという闘いを始めました。ニューヨークの冬は厳しく波しぶきが釣竿や舳先に凍りつきます。ですからこの頃、ニューヨーク湾で冬釣りをしている人は誰もいませんでした。更に当時のニューヨーク湾の海底はヘドロで埋まり、もちろん魚はいませんでしたが、私にとって海そのものが教室でした。春、何日もかけてようやく釣り上げたヒラメも、白いはずの腹はヘドロで黒く腸からはヘドロがでてくる有様でした。ですから出来る限り湾の外に出て魚のいる所まで行かなければなりませんでした。

私が釣りを始めた当時はこんな有様でしたが、10年後の2000年頃になると、同じハドソン湾にはチャーターボート（釣りのための貸切りボート）やパーティーボート（釣りのための乗合い船・遊魚船）が、沿岸にできた無数のマリーナから大勢くり出されるようになりました。みるみるうちにハドソン湾での釣りは盛んになっていったのです。1月の週末、冬のハドソン湾には20万人を超える人々が釣りに出るようになりました。それまで漁船のキャプテンやメイトだった漁師たちが、その経験を活かしてチャーターボート、パーティーボートのキャプテンやメイトになって活躍し、より大きな収入を得ていました。パーティーボートは100人乗りで、船内には軽食コーナーや仮眠できる自由な空間があり、家族や仲間で一日をエンジョイできました。

米国では、それまで行われていた延縄（はえなわ）や底引き等、漁礁を破壊し魚を痛める漁法や、魚を大量に無駄にする乱獲漁法は、政策的に淘汰されました。魚一匹一匹を大切に捕る漁法、つまりスポーツフィッシングに脚光が浴びるようになり、それによる経済効果は大きく伸びました。それにつれてボート製造業も飛躍的に伸びていきました。

河と海が死ねば未来がない

自由の女神像のあるリバティー島は、17世紀にオランダからイギリスが譲り受けた頃は牡蠣（カキ）の島と呼ばれ、人々はここで獲れた牡蠣を食べていたそうです。牡蠣はご存知のようにきれいな海で獲れたものでなければ食べられません。スポーツフィッシングが国民的スポーツとなって乱獲漁法が淘汰される以前には、ハドソン河沿いに発達した多くの企業が産業廃棄物を河に捨てたため、いつの間にかハドソン河や湾はヘドロの河、ヘドロの海となり、魚介類は生息できなくなりました。ハドソン河や湾は死の河、死の海と化したのです。

河と海が死ねば未来がないことに気づいた米国政府は、河や海の浄化に向かって大きく舵をきりました。1970年頃より本格化した大気汚染や水質汚染に関する対策を更に強化し1986年以降には、生活廃水や産業廃棄物を河に捨てることを一切禁止したのです。住宅廃水は自ら浄化せずには直接河や海には流せないようにし、海岸沿いの土地は自費で土壌を完全浄化しなければ売却できないという法律をつくりました。何十年前であろうと河や海に産業廃棄物を捨てた会社や個人は、自分の責任と費用で引き揚げるよう義務づけたのです。

更に米国政府はハドソン湾に牡蠣の殻を敷きつめて牡蠣にヘドロを食べさせ、それらの牡蠣たちを沖合

に運んではヘドロを吐かせ、きれいになった牡蠣を再びハドソン湾に運んで水域の浄化を繰り返しました。２０００年頃になるとハドソン湾海域では海水浴が出来るようになり、水を飲んでも腹は下さないようになりました。今までいなかった多くの種類の魚も湾や河の上流まで戻ってきました。ハドソン湾の海底の各所に使わなくなった戦車や列車を沈め、漁礁をたくさん造り魚が繁殖するようにしました。

　このような努力の結果、米国では現在、ボートでの海釣りや岸釣りをする人の数は、リーマンショックの波を受けたにも関わらず、現在も増え続けています。ちなみに米国のボーティング人口は、２００８年は７０００万人、２００９年は６６００万人でした。ボーティング産業は米国で21世紀になって最も伸びている産業の一つです。２００９年には販売とサービスで3兆８００億円を産み出しました。ノースカロライナ州はＦＲＰボート製造技術者を無料で教育し養成しています。この流れはカリブ海を越え南米にも波及しています。米国の多くのボート会社は南米にボート工場を移動させています。

緑と水の大陸　南米

　当の私も米国でのボート造りを他の人に譲り、現在、南米にボート会社を建設中です。パラグアイ工場で製造した「アメリカ製」パラグアイ産スポーツボートを、去る２０１４年11月12日に初めて日本に輸出し、パラグアイ政府の注目を受けマスコミを賑わせました。なぜ、そんなに市場から遠い大陸のど真ん中のパラグアイでスポーツボートを造るのかと聞かれます。私は近い将来のためにグローバルな企業を準備しています。パラグアイの周辺には、サンパウロ、リオデジャネイロ、モンテビデオ、コリエンテス等、ラテンアメリカのスポーツボート市場の3分の2が集まっており、パラグアイは南米スポーツボート市場「黄金の三角地帯」の中心位置にあります。加えてパラグアイのグアラニー族は世界最高峰といわれるアンデス文明を創った人々の後孫であり、１５０００年前北東アジアからベーリング海峡を越え南米まで旅をした勇猛果敢な蒙古斑をもつ私たちの親戚です。加えてパラグアイは南米の地政学上の中心地であり人間の住む生活の最適スポットです。

　南米はご存知のように緑と水の大地です。アマゾンと共に大湿原地帯パンタナールは、地球の3分の2の酸素を生み出し「地球の肺」といわれ、将来人類が争奪する場所といわれる福地です。言わば北東アジアを文明の一極とすると、その対極にあるパラグアイは、将来、北東アジアと共に「地球村と新文明の両極の中心地」となる場所です。私は、このパラグアイに海洋最先端技術を移植し導入することによって、現地の貧困や腐敗などを克服し、この国が世界の最先進国家の仲間入りをすることを目標としています。それが突破口となり導火線となって全世界の平準化、全世界の福地化が実現すると確信しています。これまで私たちの先輩がパラグアイに入植され辛苦を乗り越え、農業の分野でパラグアイの発展に寄与してこられました。その恩恵を受けながら私たちは河や海の価値を見直し、魚釣りや魚食文化の振興、海洋文化発展の分野でパラグアイや南米の為に役立ちたいと願っています。私たちがパラグアイ工場で造るボートは80パーセントの原材料を米国から輸入し高いクオリティを保つ「アメリカ製」パラグアイ産ボートです。販売においては米国現地の米国製、石巻の日本製（石巻）、韓国木浦の韓国製ボートも日本で販売して参ります。

日本が迎えた運命の時

　21世紀は海洋の世紀と呼ばれています。環太平洋時代を迎えた今日、日本は根本的に緊急に海洋国家、海洋趣味産業国家として生まれ変わらなければならない「運命の時」を迎えています。「環太平洋時代を迎えた」ということは、ミノア・ギリシャ・ローマ・スペイン・ポルトガルが創り出してきた「地中海文明」よりも、英国・米国が中心となって創り出してきた「大西洋文明」よりも、もっと深くて広く高い完成級の文明「環太平洋文明」を創出しなければなりません。全ての観点からみるとき、その先頭に立つのは日本であるという結論になります。日本列島がその身を委ねている太平洋は地球の半分を占めており、太平洋の黒潮が世界の海を回し活かしているのです。

　中世、ローマンカトリックが形式化し腐敗堕落した為に神の存在を否定する無神論が芽生え、ヘレニズム（人本主義）運動が復興し、その結果、共産主義思想が生まれ共産国家が生まれました。戦後、共産主義国家は世界の3分の2を席巻するかの如く膨張し、ドミノ現象のようにアジアが赤化されました。１９６０年から１９８０年代には日本も共産化の危機にさらされ

今にも呑み込まれそうになりました。

戦後日本は、共産戦線の境界線となった韓半島38度線防衛の為の後方支援の役割を果たすことになりました。その役割を果たす為に日本は、英国が海洋政策を強化することによって興った産業革命と、その成果である西欧物質文明の果実をアジアで初めて取り入れた国となり、世界第2位の経済大国として発展いたしました。しかし今日、その西欧物質文明の限界が明らかになって来ました。欧米諸国をはじめとした世界をみるとき、物質偏重文明はそれ自身では乗り越えられない道徳的退廃によって、高い山の上にある石が谷底に落ちるように崩壊の一途を辿っています。世界の価値観は混迷しその為に未曽有の問題が多発しています。これまでの価値観を超える「新たな文明を興さなければならない運命の時」に来ていることを心ある多くの方々が心に痛みをもって実感しています。あの東日本大震災で世界を感動させた日本の精神。それを基礎にしながらも広大な太平洋を基盤にした新たな海洋文明、「環太平洋文明」を世界に先駆けて創出しなければならない緊急の時を今の日本は迎えています。

英国が産業革命を興した理由は偶然ではありませんでした。島国である英国にとっては四海を守り、海を拓くことに国の存亡が係っていました。その為エリザベスI世は海洋政策を強化し海洋教育をとり入れ、国民が海で自由に生きる力を持つように導きました。ところが海には最高度の科学性や創造性が潜んでいるために、海洋強国を作りながらも同時に英国は産業革命を興す国となりました。7つの海に君臨し日の沈まない国と呼ばれた繁栄の所以は海にあったのです。

真の環太平洋文明時代と日本のミッション

歴史の軸足は既に大西洋から太平洋に移っています。環太平洋時代において、日本は英国に代わる国として、新たな海洋文化文明、環太平洋文明を拓く使命を担っています。その為に日本は国策として海洋政策を強化し海洋教育を幼い年代から取り入れ、全国民が海での生活を身につけ「海で自由に生きる力」を持たなければなりません。海には最高度の科学性・創造性があるので、21世紀の産業革命は日本から興るのではないでしょうか。日本はこれまで以上に世界福地化の為に貢献できるに違いありません。ちなみに海で自由に生きる為には、どんな荒波も安全に越えていく絶対安全安心なボートの開発が必須です。各家庭が車を保有しているように、各家庭や各自が日常ボートを保有する日はそう遠くないでしょう。これからは欧米がそうであるように、日本もボートで海に行き生活することが最も先進的なライフスタイルになるに違いありません。

魚は一匹、平均30万個の卵を産みます。日本の漁業はヨーイドンのマラソン方式か北欧型管理漁業かいずれかを検討していますが、その次元では足りません。魚が異常なほど減少しているのです。魚を抜本的に殖やさなければなりません。海を本然の海に戻さなければなりません。陸も空もきれいにしなければ海はきれいになりません。1994年国際海洋法を受け入れた日本は、2000億円ものお金を投入しマリーナを造り海洋時代に備えようとしましたが、実のところ、魚を寄せつけないコンクリートで海岸線を固め、魚の産卵地を破壊し海を破壊してしまいました。海洋浄化政策、魚の増殖政策が遅れに遅れています。本来、海は人間が3分の2の時間を生活の場所として過ごすところです。人間の体の3分の2は水分ですから人生の3分の2の時間は、海や水と関わりある生活をすることが平安であり健康であり豊かで幸福なのです。

私は日本人として、日本がミノア海洋文明を創ったエジプトよりも、大西洋海洋文明を創った英国よりも、世界最高の海域である環太平洋に、遥かに高度な海洋文明を創る国となることを願っています。価値観の崩壊や公害による環境破壊、加速化する食糧問題によって崩壊しつつある世界を、永久に持続発展（サスティナブルデベロップメント）可能な世界に産み直すことのできる日本、それを可能にする「真の環太平洋文明時代」を創出することのできる日本を、皆様と共に建設したいと願っています。

佐藤 健雄（さとうたてお）
福島県出身。早稲田大学土木工学科。
趣味はスポーツフィッシング、狩猟、マラソン。趣味が高じて不沈絶対安全安心ボートの製造に挑戦。
Hobby World Marine Group CEOとして日本、米国、南米を拠点に精力的に活動。
グローバル企業をめざす不変不屈の永遠のファイター。海の思想家。海のエキスパート。

特集
FEATURE ARTICLES

海からの視点に立つ

1000年に一度の地震津波に耐えうる「東日本復興政策」とは何か

▼石巻湾を中心とする海洋趣味産業ゾーン

【死活的に重要な海岸線】

２０１１年３月11日午後14時46分18・1秒、１０００年に一度と言われたＭ９の東日本大震災が襲い、死者・行方不明者１８・４８３人（２０１５年１月現在）に及ぶ犠牲者を出してしまいました。その後も余震が続き、現在、東京直下型や南海トラフ大地震もかなりの確率で起きる事が予測されています。安倍晋三総理は首相就任後、東日本大震災の爪痕を視察しながら、「１０００年に一度の津波にも耐えられる復興政策を実現する」政策立案を掲げておられます。東松島の宮戸地区に行くと、７０００年前の縄文時代から何度も何度も津波で破壊された痕跡が残っています。その度毎に大きな犠牲者を出してきました。有効な防災方策が無かった事が伺われます。

南三陸町に行くと、チリ地震の津波が突然襲い、多くの犠牲者を出した事が生々しく記録されています。去る１月17日には阪神淡路大震災20周年を迎えました。この大震災の時「メガフロートが海にあったらどれだけの人命が助かったか」と、その後、多くの識者によって悔やまれました。東日本大震災でも米空母ロナルド・レーガンがどれだけ多くの人命を救助したかが記録されています。大震災ではどういう場合に人が助かったのか、どういう場合に犠牲を多く出したのか等が記録されています。それらの貴重な証を通して多くの教訓を伺い知ることができます。

また、このような大地震と津波という自然災害がなぜ起きたのか、その対応、予防策も繰り返し語られてきました。津波は長年人が海に流してきた汚物や汚水をヘドロという形で陸上に返してきたものであることも証言されています。綺麗になった海では大きな魚がいきいきと、より大きく育つようになったことも多く報告されました。更に、操縦者が運転していた船は殆ど無事だったことも報告されています。

日本の漁業に携わる漁師の方々は年々３％減少しており、東日本大震災では９％減少したことも報告されています。失った船の数は２万６００隻中２万隻とも言われました。この失った船の数は、如何に多くの方々が海と共に生き、海と関わって暮らしていたかを示す数だと考えられますが、何故これだけの船を失ってしまったか考えなければなりません。ゆえに復興の着目点は、今後、１０００年に一度の大震災大津波が来た場合、人命の安全を第一に確保しながらも、海から離れることなく更に強力に海と共生していくことができるような「海に向かう積極的な復興政策の立案」、そこにあるのではないかと考えます。

しかし、今の政府や指導者の結論からは、高台には住宅や公共施設を造ったり、海岸線に高い防潮堤を造って誰も住まない公園にするくらいのアイディアしか出てこないのが現状です。何という指導者不足、アイディア不足でしょうか。いえ、これはもっと根本的な知識の問題に根ざしているものかも知れません。すなわち、人間は誰でも人生の３分の２を海で生活すべきである事、海に最も深い科学性や創造性が潜んでいる事、地中海のクレタ島のミノア文明（海洋文明）がギリシャ・ローマ文明を創り、大西洋のイギリス（海洋国家）が興した産業革命の基盤の上でアメリカが生まれたように、海で自由に生きる力をつけた国々や人々によって人類歴史が発展してきた事などは検討課題には入っていないようです。海や海岸線を如何に主管するか、これは国家と国民にとって死活問題です。日本の指導者の方々には、「海岸線が人間にとっても魚にとっても死活的に重要な場所である」という考察などは復興政策の立案のなかには毛頭無いように見受けられます。

私たちは既に充分な地震や津波による教訓を持っています。これに対応するため

の科学技術も発達しています。海や陸などの自然と人間との関係も煮詰まってきています。環太平洋時代、海・水の世紀が来ることによって、人間と海との関係が、人間と陸との関係より重要である事も論じられ始めています。海は「汚ない、臭い、危険、きつい」、いわゆる4Kは克服していかなければならない時であることも知っています。この様な立場に立って「どの様に復興すべきか」を考えていく必要があると思います。特に日本は島嶼国家の代表であり、環太平洋時代の到来を迎えた今日、海に関する事ではどの国よりも重要な使命をもつ国と言っていいでしょう。地球上には島国も多く、世界の殆どの人々は河辺や海岸線、海岸線に近い所に住んでいる事を考え合わせるならば、地震津波で苦しんでいる世界の人々の希望の松明(たいまつ)になるような東日本の真の復興策を立案するぐらいの知恵が必要ではないでしょうか。そこでまず復興の原則について大まかに共に考えてみましょう。

【復興の原則と海洋強靭化】

1 海岸線は人間生活の生命線。普遍的に人は海岸線を中心に住んでいる。東京や大阪はじめ主要大都市は大きな湾に接し長い海岸線を持つところに発達している。海岸線は内陸より5倍から10倍の高い価値がある事を根本に考えなければならない。「人間生活の3分の2を海で生活をすることの必然性」をまずはっきりと理論的にも理解し提唱する。それを前提に考えた場合、海岸線に住む事の貴重さをまず考慮すべきである事、これを原則的考えとする。

米国では「陸の終りが生命の始まり」「海で生活する時、人間が最も人間らしくなる」という言葉や概念がある。陸の上だけでの生活では、人は鬱病や他の精神的な病(結果として様々な疾病)に陥りやすく不自然な人間になりやすく自殺者等も多くなるという意味。私たちは「地球の3分の2が水で覆われているように、人の身体の3分の2が水である事は偶然ではない。人間が地球という大自然を主管するために、地球と人間が共通要素で構成されている」と考える。人間の周りから水蒸気が全く無くなれば目は消滅し、人の身体から汗で5％の水が出てしまうと(実際的には)死に至ってしまう。この様に水と人間の身体は死活的に重要な関係をもっている。裏返して考えれば「3分の2の生活を水に接して生きれば人間の身体は最も健全に発育し成長する」と言える。米国人はこのことを肌で感じ、実験をして確認をしながら確信して海に出かけている。海はお母さんのお腹の羊水の延長。そこから生命がスタートし赤ちゃんの時から海で成長すると、脳細胞が完全に発育し神経系統や四肢百体も完成する。海から人間の生活を考える、即ち真の海洋文明を考える。これを不離絶対の、第一の原則とする。

▼海と陸と人間の共生地帯構想と防災システム

2 海での海洋趣味生活は幼少時から死ぬ時まで可能。従って政府は、学校では幼稚園から大学まで、学科の3分の2は海について学べる様にカリキュラムや学部を再編し、各市町村や各家庭単位では、全国民が生涯に亘って海で魚釣りや趣味生活が出来るような環境創造をすることが必要。これを第二の原則とする。

3 海の栄養素は河川の水が運んで来る。その栄養素が最も多く堆積した大陸棚に人間を最も健康で長生きさせてくれる「最も栄養価の高い魚介類」が一番多く生息する。その海が人間を最も豊かに涵養(かんよう)している。即ち人間が住む最適地は海岸線である。これを第三の原則とする。

4 海岸線より3km内陸側に、非常時に避難所を兼ねる防災高速道路を建造する。そして海岸線から防災高速道路に直結した幅の広い避難道路を、海岸線に沿って1kmから3kmの間隔で造成する。今回の東日本大震災の津波も3km内部の道路で止められている事例が多い。それを参考にする。これを第四の原則とする。

5 海岸線に超未来型防潮堤をつくる。通常は平坦な海岸線。通常の商業活動場所。海岸線に沿って、最高度の技術を駆使した、強度が充分な緊急時防潮防波システムを地下に設置する。津波時には緊急信号によって10分程で津波防潮堤が地中から現れる。今回、津波の直撃を受けた防潮堤や建造物も、その強靱さの故に破壊されずに生き残ったものもあり、海岸線の高台に建つ建造物は無傷だった。通常は生活の場所が、津波時には場所ごとせり上がり、防潮システムに転換される事も考案すべきである。単なる無人防潮堤兼公園ではあまりにも思慮にかけていると言わざるを得ない。

6 海に津波防潮壁または津波緩和装置を。海の中に海の環境を破壊しない津波緩和策を施すことも研究課題である。

7 海岸線の家は津波対応型にする。石巻市の旧北上川河口近くの中洲にある漫画館やマリーナの建物は、遡上す

る津波の直撃を受けたにも拘わらず、殆ど無事だった。漫画館の形状が円い形状であった事や、中瀬マリーナが女川原発を造った時の強靭な鉄骨を使い、土台がしっかりした建物だからとも言われている。1階の諸物は流されたが、1階の奥と2階の事務所は無事に残った。通常2階に主な機能を集めたタワー型の鉄筋流線型建物を海岸線に建造してはどうか。1階は流されても損害の少ない場所として通常は使うなど。どんな津波にも耐える建築物の考案をする事も重要。日本は充分な技術を持っている。

8 海岸線は自然保護区域に。海岸線は絶対に汚染しない。魚の孵化や稚魚が成長する環境を保護する。増殖施設を造る。海岸線は遊歩道にする。廃水、ゴミはいっさい海に流さない、捨てない。海岸線の土地の売買には、米国のように土壌の完全浄化条件を義務付ける。土壌の浄化も積極的に進める。全国土・土壌浄化を達成する。海も浄化される。

9 海を海洋観光趣味産業基地に。日本各地の海岸線や200海里海域に、その海域の持つ資源や特徴を生かし、個性溢れる最高度の海洋観光趣味生活基地を創出する。海洋国家日本にとって見落としてはならない地方創生の中心は海洋創生ではないか。

10 漁法とボートと釣り具を変える。まず、臭い、汚い、危険と言われる海岸線と船を、臭いのない清潔で安全で強固な海岸線と船にする。係留地は大型漁船用以外は西洋式マリーナ方式にする。魚を傷めず魚礁を壊さない漁法に変える。特にボートは絶対不沈方式にして、ボート内外は高級ホテルより綺麗にする。綺麗に維持できる人間の主管能力を高める。ボートの速度も近代技術を駆使して高速度化を図る。「人は常時海で生活する」文化の創出を図る。

11 人間を海洋対応型に変える。生活の3分の2を海に投入し、毎日海に出て海で自由に生きる能力をもつ人間造りをする。想定外を消化できる謙虚で胆力のある人間づくり。無限の逆境の中でも逆境に調和し、目標を必ず実現できる人間の養成。これが実現出来ないと津波対応型海岸線の創出に対する発想も出てこないし実現も不可能となる。

12 国土(陸)を海洋型国土に。各地に世界海洋村をつくる。海を基盤にした生活に対応する国土の再建。河川に架ける橋はボートの航行の自由を保証するものとする。全ての道路はボートを自由に牽引できるよう、橋桁などの障害を取り除き、24時間ボート自由牽引道路にする。ボートは津波の際、流されない様に、操縦者のいないボートはボートホテルや防災自由高速道路特設ボート駐船場、または近くの「洋上観光基地」に格納する。

13 主な海域に自走式、特別浮力型装備、救難艇装備、災害支援艦兼大型海洋観光船(海の駅も兼ねる)「LAS&RISM」(Life Aid Station, Resort Island Sendai Matsushima)を配置。巨大地震や津波に対しては海から対応する機能を兼ね持つ。通常は、ホテル、ヘリポート、病院、マリーナ、マリンリゾート、レストラン、ショッピングモール、気象観測所、海洋訓練学校等を兼ねた海上海洋観光総合基地。総合的な海上海洋観光趣味産業基地。

14 先進的海洋総合大学の創設と研究。人類歴史を遡ってどこが間違っていたのか。どうしたら真の海洋時代を開けるのかを総合的に研究する。

陸の価値のみに視点をおいた陸上偏重型文化文明の延長線上に、海洋国家日本の未来はありません。国土強靭化政策等で50兆円ものお金を浪費している時ではありません。陸上偏重思考の都市の分散化による地方創生にお金を浪費している時でもありません。海や海岸線で安心して、精神的にも物質的にも最高に豊かに暮らせる文化文明を創出する政策立案に舵を切る時です。第二の国土改造を意味する国土強靭化ではなく、海洋強靭化による海洋創生時代です。

【石巻を金華山と松島を結ぶ一大海洋観光趣味産業海域に】

以上の復興原則に基づく東北復興案に基づいて、まず石巻湾を金華山と松島を結ぶ一大海洋観光趣味産業海域にします。昔から石巻の人々は魚を買わなくても魚を食べることができたと石巻の人々は言います。魚の水揚げが多く、トラックが溢れた魚を道路に落としていくので拾って食べることができたというのです。石巻魚市場は東洋一だったと言われます。「新幹線も他の企業誘致も要らない。魚のお陰で充分裕福だった」そうです。世界にはあちこちに同じ様な町があります。アメリカの漁業発祥の地、ボストン湾のグロースターという町もそうです。韓国の麗水などもそうです。これらの市は造船や重化学工業、ハイテク産業の誘致等に動き、その結果、海と魚介類の生息地が破壊され崩壊していきます。そういう中で漁業再興を図ろうとしますが、ますます漁業、漁港は衰退していきます。どこも同じです。何故そうなるのかを研究しなければなりません。今回の大震災でこの石巻が最大の犠牲者を出しました。

1994年に国際海洋法が制定された時、韓国はすぐにこれを批准しました。引き続き韓国はスポーツボーティング産業が韓国の未来産業の核心であるとの認識に立って、党派を超えて「海洋先端技術最先進国家になる事が、韓国が一挙に世界の頂点に立つ事である」と決議しました。その上で、漁業が完全に破壊された最貧地である南海岸発展の為の法案を制備し、2020年に向けて「韓国南海岸時代」を掲げて着々と準備しています。麗水を中心とした南海岸一帯を、東洋のみならず世界一の海洋観光趣味産業の中心地域に創出しようと、着々と投資し、実現の途にあります。韓国南海岸は、古来より

▼田代島・金華山周辺

韓国で最も豊かな漁業基地でしたが、昨今は、重化学工業などの誘致の為に海は汚れ続け、漁獲量は落ち込んで、遂にその地域は韓国の最貧地帯となりました。そして北朝鮮スパイの潜入地帯となり反政府運動の拠点となったのです。この南海岸を、従来どおりの漁場回復による通常の復興によってではなく、ここ一帯を「海洋趣味産業レジャーランド」として再生しようとしています。この南海岸を韓国の成長戦略の中心地と位置づけ、韓国発展のランドマークにしようという計画です。

一方、日本は１９９４年、同じ様に国際海洋法を批准しました。その上で２０００億円の予算を組み、全国の海岸線をコンクリートで固めました。魚の生息地を破壊したのです。日本は残念ながら、21世紀が海洋の世紀であり、環太平洋時代、２００海里海洋時代が到来した意味、その時代が歴史をかけてようやく到来した意義を理解できませんでした。トヨタや日産などの自動車業界全体が微かに「世界的海洋レジャー産業時代の到来」を予測し、スポーツボーティング産業に参入いたしました。しかし、陸上文明の代表的な企業である自動車産業の観点から海洋産業への参入は、あまりにも露骨な商業主義的動機を露わにしてしまいました。海の観点から出発したものではない為に、あるいは真の海洋時代、環太平洋時代の本質を理解した上での出発がなされていない為に、軌道に乗ることが出来ませんでした。

石巻は東北の大動脈、北上川の河口に発達した都市です。松島や金華山などの名勝地や最高の漁場が出現したのは偶然ではありません。北上川が運んでくる豊かな栄養素がこの漁場に堆積しています。しかも、ここは親潮と黒潮の出会う海域であり、魚と釣りには至上最高。世界的海洋観光趣味産業地帯を形成するには最高の立地条件を擁しています。古来から縄文の人々が好んで住んでいたのも偶然ではありません。そこに住む事がどんなに素晴らしいか体験していた為です。松尾芭蕉が「あー松島や、松島や」と絶句したのも偶然ではありません。地勢がそうなのです。

【石巻の復興政策】

石巻の復興政策案は次のとおりです。

重化学工業等は誘致せずに、まず石巻湾岸全体をリクリエーショナル経済特区に指定し、世界的海洋観光趣味産業地帯へと創出すべきです。既述の「復興原則」に基づくと共に、サン・ファン・バウティスタ号を建造し送り出した伊達政宗公の海洋政策思想も合わせ、石巻復興政策を創出するべきです。２０２０東京オリンピックまでに、東日本大震災復興政策の結実を全世界に誇れる形で見せようではありませんか。ここ石巻から真の生命を吹き込んだ「新生オリンピックの松明（たいまつ）」を出発させましょう。

私たちはまず、世界最先端技術を駆使した安全安心な「海洋趣味生活ボート」を創造します。絶対安全安心なボートが必要です。従来から漁業に携わって来られ、東北の海を知り尽くしておられる方々が喜んで使うことのできる趣味産業・趣味生活用の常用ボートを創出します。２００海里を１日生活圏として航行できるボートを中心に、関連海洋趣味産業を興して参ります。もちろん、ＩＴ産業、ロボット産業から航空産業に至るまで、関連事業は全て行います。他の全ての産業は海洋趣味産業を補完する為に必要です。主体はあくまでも海洋趣味生活ボートを中心とする海洋観光関連産業。仙台から石巻まで防災高速道路や超近代的新幹線で結び、仙台から石巻までは15分圏内、東日本海岸線は全域を１時間圏内で結びます。

石巻の町も海も海陸両用ボートが走ります。石巻湾はあらゆる海洋レジャーボートが行き交い、海底レストラン、海上レストランが建設されます。魚流通産業に関しては、石巻の海の幸は、石巻から直接、日本や世界の各家庭に配送され、高質で安価な魚が届けられます。今までとは比べものにならない豊富な量が供給されます。養殖産業や増殖産業も確立されます。人々は年４回釣りトーナメントを行い、釣り技術、ボート、釣り具、釣り用衣類などの開発を競い合います。海洋基金制度やローン制度も確立され、石巻海洋趣味産業の無限の発展をバックアップ致します。

東日本大震災時、世界の人々に感動を与えた「東北精神」も海洋精神により産み直され更に昇華され、真の生命にあふれた「石巻海洋精神」を創出します。その上で５家族３世代コンドミニアムも創り、世界の人々が一諸に住み、超宗教、超国家、超民族の一大家族社会の雛型となる「世界海洋村」も創ります。東日本の海岸２００海里海域で釣りをしようと、世界中から集った人々が共に楽しむワールドショーケースを創り、人類海洋総和文明を創出します。海洋建築士、海洋都市建築士を総動員して海洋真時代の新プロジェクトを次々と創出して参ります。参照の図はまだ一部のものであり、初期段階のものです。

以上のような復興策は如何でしょうか。２０２０東京オリンピックで世界の人々は「日本は3・11を超えてどのように復興したか」を同時に問いかけるに違いありません。その時までに世界の希望となるような復興を、国家国民総力をあげて成し遂げていきたいものです。

（I&海洋建築家チーム）

海洋政策の研究

提言 海洋政策13の柱

提言に至るまでの経緯

春爛漫の季節を今にも迎えようとした２０１１年３月11日、大地震と大津波が東北海岸を中心とする太平洋沿岸を襲いました。この大震災大津波は、私たちのこれまでの大自然に対する考え方、生き方、海との共生のあり方に大きな疑問を投げかけ、その転換すら要求しているかのようです。２万人もの犠牲者と癒えることのない痛みを抱えたそのご家族のためにも、そして日本各地の人々、同じ災害で苦しむ世界各地の人々の為にも、このような犠牲が再び起きることのないよう、21世紀の叡智を結集して「真の復興再生政策」を構築しなければなりません。

未曽有の大津波が直撃した三陸海岸は、魚が最も多く凄息している豊かな海、世界的三大漁場の一つを擁しています。加えてそこには日本三景の一つ、松島があり、オーストラリアのゴールドコーストにも匹敵する美しい相馬海岸がありました。海の恩恵を受けて美しい海岸線で海と共に生きてきた、そしてこれからも生き続けていく日本人にとって、いかなる復興策を構築すべきかという命題は、今後の日本１０００年の国運をも決する死活的緊急重要課題と言っても過言ではありません。

２０１１年３月11日以降の４年間、被災した現地の方々と会話し「真の復興策」を探求し、見識ある先生方のお話に耳を傾けて参りました。東日本大震災復興再生支援を主軸テーマとして、「東日本復興を世界復興のたいまつに」「根源的転換と復興・飛躍」「海からの視点に立つ」「海との共生」「東北海岸に国際的海洋観光モデル都市建設を」などをテーマに「真の復興政策はなにか」という内容を鋭意追求して参りました。その結論として今日、私たちは「海洋政策13の柱」を国民の声、現場の声として提言する行動段階に至りました。

因みに４年間に亘って協賛した記念講演会は以下の通りです。各講演会には各界の学識者や専門家が集って下さいました。２０１１年６月25日に東京都千代田区平河町弘済会館にて開催された「東日本大震災復興再生支援特別講演会」、テーマは東北復興を世界復興のたいまつにしよう／東北海岸に国際的海洋観光モデル都市建設を！。２０１２年６月30日に同千代田区平河町砂防会館にて開催された「東日本大震災復興再生支援特別講演会」、テーマは東日本の復興を世界復興のたいまつにしよう／環太平洋時代到来の視点に立って考える。この講演会は海花東日本復興の会（宮城県議会議員　今野隆吉会長）、日本を真の海洋趣味産業国家に育てる会が共に協賛。２０１３年２月11日に宮城県仙台市シルバーセンター交流ホールにて開催された「祭典・東日本の復興を世界復興のたいまつに！」は、海花東日本復興の会が主催。２０１３年６月29日に同千代田区平河町海運クラブにて開催された「アジア太平洋地震津波国際会議」はＮＰＯ法人世界平和海洋訓練教育協会が主催。２０１４年１月26日に宮城県仙台市エル・パーク仙台セミナーホールにて開催された「海を基盤とする政策への大転換を！」は、海花東日本復興の会が主催。２０１４年６月28日に同千代田区平河町都市センターホールにて開催された「日本を再生・大飛躍させる海洋政策」はＮＰＯ法人世界平和海洋訓練教育協会が主催、などです。

時代は環太平洋時代へ大きく転換し、政治、経済、教育の面から海洋の重要性が注目されるようになりました。私たちは３・11東日本大震災によって覚醒させられたかのように、その真の復興策を探求する中で、新たな海洋政策構築の必要性に迫られました。以下の内容が、３・11東北大震災以来、その未曽有の犠牲と痛みの上に立って模索し構築した「提言　海洋政策13の柱」です。

【提言　海洋政策13の柱】

一、海洋省の創設（海洋管轄管理、政策立案、法制備等の一元化）

海洋省を創設し多くの省庁が関わって行う海洋の管轄管理、政策立案、法制備等を海洋省で一元化する。新たな海洋基本法の策定の下で、新たな海洋政策を強力に進める。

二、先進的海洋総合大学の創設

21世紀は海洋・水の世紀。太平洋を中心とする環太平洋時代が到来。日本はその先駆者的役割を果たすため、真の海洋文化文明の創出、海洋趣味生活時代の創出のための研究機関として先進的海洋総合大学を創設する。大学は、東日本大震災の復興政策を単なる復旧政策に終わらせず、海からの視点に立ち海洋政策を根本から考え、１０００年後を見越した真の復興政策構築に貢献する。世界的な海洋未来モデル型復興策とするためのドリル的役割を担う。

三、海洋の廃藩置県および新たな海洋開国

海洋に関する法の整備、規制の徹廃と再構築を行う。全国どの海域でも誰もが自由に生活ができ、海を自由に利用活用できるように法律の再整備を行う。海を陸上の概念による法支配から解放し、海を基盤にした法制備を行い再構築を図る。世界共通の海洋政策と日本の海洋ルールの一致化。これまでの漁業政策からの脱却を図る。

四、海洋の本然化

海の完全浄化、海岸線の浄化、自然化を実現する。最終的には大気や国土汚染を解決しなければ海の完全浄化は実現しない。海を浄化し本然の海に戻せば400億人類を養うことができる。魚介類が常時安全に安心して生息できるよう、海の本然化政策を強力に遂行する。

五、200海里（370km）を一日生活圏にする海洋趣味生活の創造

200海里を一日生活圏にするための高速、不沈、絶対安全、完全エコボートの研究開発と創造が必須。漁師の方々の生活の質の向上を図る。全国民参加型で釣りや養殖や魚の管理、流通産業に携わる新しい漁業のあり方を創造する。環太平洋時代にふさわしい漁業先端技術最先進国家をめざす。

六、日本の国土建設を、海洋を基盤にした海洋型国土建設政策に大転換

現在まで陸上優先の観点に立った国土建設を図ってきたため、欧米と違い日本の道路ではボートを自由に運搬できず、河川でも橋桁が低くボートが自由に往来できない。海岸線にはボートが自由に停泊し出航できるシステムがなく、旧態依然の海岸線となっている。これをボート優先政策に大転換させてこそ海洋国家日本の未来が開けてくる。

七、海洋趣味産業型津波防災自由高速道路を海岸線から約3km内側に建設

津波防災自由高速道路は防潮堤の役割を果たす。料金所は無く全ての人と自動車の避難所も兼ねる。50キロごとにサービス・エリアを作り、海洋趣味産業型ショッピングモールを置く。

八、海岸線に海と人との共生地帯を創設

全国民が生涯の3分の2を海で生活できる環境を創出する。海が海洋趣味生活の場であると同時に最も生産性の高い所、最先進技術の創出される所とする。海岸線に緊急防潮堤システムを創出する。

九、日本全国の青少年の海洋訓練

「海を制する者が世界を制する」「海を制する国の言語と文化が世界の言語と文化を創り出す」という諺を、海洋政策を強化することによって実現したイギリス。かつてのイギリス以上の国になることを日本はめざし、全国の小、中、高、大学に海洋訓練教育課を創設。3分の2の学科は海洋訓練教育に関するものとする。

十、海洋観光趣味産業モデル都市の建設

世界最高の釣場を持ち世界最多の魚種に恵まれた日本周辺海域に、世界から釣り観光客を動員する。そのための海洋観光趣味産業モデル都市建設が急務。海洋観光による観光立国をめざすことを日本の成長戦略の柱にする。海洋先端技術最先進国家を建設する。海上都市、海中都市の建設、海洋趣味生活に適合する衣食住の研究開発等を行う。海洋文化文明の創出を全世界に先駆けて開拓。

十一、海上、海中、海底資源の開発

水素エネルギー、海流、潮流エネルギー、淡水化技術等の開発を行う。人間社会の生活全般に役立つ、海上、海中、海底における資源開発を本格化させる。

十二、海洋食糧資源増産のための増殖産業の本格振興

人間のもつ科学性、創造性を進化させることにより、海、河川、湿原地帯の再生を図る。それと共に、魚介類の孵化、養殖、増殖、放流技術を開発向上させ、各種の海洋魚礁、海洋牧場等を構築する。海や河川、湿原地帯を最大の食糧資源の生息地として再生。同時に世界各地に、養殖技術を駆使し養殖地帯や養殖ビルを建設していく。

十三、近隣国海洋都市との海洋都市同盟の構築

海は一国で管理できるものではない。近隣の国の海洋都市と海洋同盟を結び、同盟を結んだ海の海洋環境保全や海洋、海底資源の協働開発を図っていく。

（編集部）

石巻・真の復興を考える

震災直後、石巻で始めたボートづくり

２０１４年10月14日、石巻を台風が直撃するという天気予報の中、北上川河口、石ノ森漫画館のすぐ脇の中瀬マリーナで「ＥＴ１８０第一号 Good Go ボート完成進水式」が行われました。大震災後の石巻の地で、初めて産声をあげた東北復興第一号ボート。不思議にもその日の天候はこの進水式を応援するかのようでした。早朝６時頃日和山は予報どおり豪雨に襲われていましたが、その直後から台風は駆け足で石巻を通過。式典準備に取りかかる朝７時頃には太陽が顔を出し、式典開始の頃には大きな二重の虹が空にくっきりとかかりました。式典参加者は刷毛で描いたような力強い虹に感動し沸きたちました。このマリーナの経営者は門馬壽之さん。北上川河口中瀬でスポーツボート用のマリーナを経営されておられます。

３・11の大津波では建物の一階部分が全部流されましたが、クレーンと二階の事務所は助かりました。悠々と流れる北上川の未だに津波の爪痕残る中瀬で第一号復興ボートのお披露目進水式が行われました。

18フィートのこのボート造りが石巻で着手されたのは震災直後。日和大橋がすぐ近くに見える日和山の麓、門脇地区がボート造りの場所でした。門脇は想像を絶する悲劇に見舞われた地域です。震災後は黒こげになった車、なぎ倒された墓石、炎上跡の痛ましい門脇小学校、無残な宅地跡がありました。その頃、その地域では亡霊が出るという報道も頻繁にあり、本当にその場は言葉には言い表せないほどの苦痛の場所でした。

その門脇地区に宅地を全て流された菅原恵子さんという方がおられます。その方が復興ボート造りの志に感銘され、３００坪の宅地をボート工場として提供して下さることになりました。私たちは「亡くなられた２万人近くの方々の犠牲に報いるためには、この美しい東北海岸を今まで以上に素晴らしい東北海岸として復興再生したい、そうしなければならない」という、何かにつき動かされるような使命感をもって、この廃墟のような門脇で復興ボートを造ることに決めました。偶然にもこの門脇地区は古くから船大工の町で、これまでも石巻の船造りの拠点だったそうです。

電気も水も、着手後だんだん整ってきました。石巻復興のために関西より

ボート造りに駆けつけた池浦哲也さんを中心にビニールハウスの工場を立て、全国各地や仙台、石巻の有志の方々の手厚い支援で復興ボート造りが始まりました。池浦さんが造る復興ボートは最高の釣りが楽しめる、趣味と実益をかねた「スポーツフィッシングボート」です。ボート造りのメッカである米国ノースカロライナから太平洋を渡ってモールド（船型）を取り寄せ、必要な材料を集めて造り始めました。冬の寒さ、真夏の暑さを越え、ようやく昨年10月14日に宮城県石巻産の第一号復興ボートが完成したのです。

復興の鍵は海との共生

私たちは震災直後、東北海岸全域を廻り、被災された漁業者の方々を慰問し交流しました。最初、漁業者の方々は「スポーツボート」「趣味生活ボート」という言葉に対して「こんな状況下でそれどころではないよ」と応えました。本当にそうでした。住居、仕事、あらゆる当面のことに苦しまれていたのです。しかし、私たちは「この真珠のように美しく豊かな東北海岸を、ゆくゆくは世界一に輝かせたい。未来のために臥薪嘗胆して準備に取り組もう」と思ったのです。東北の人々に会うために、見事に復興した東北海岸を見るために、美しく豊かな三陸海岸で釣りを楽しむ人々が、世界から東北に集う日の夢を描いていたのです。

陸地よりも海にもっと多くの豊かさと可能性が秘められています。海には食糧資源、鉱物資源、エコエネルギー資源が陸地の何倍もあります。海の資源では魚がその代表ですが、今までの漁法である底引き網や延縄による漁法では魚を痛めたり魚を無駄にすることが多いのです。魚資源を無駄にしないで一匹一匹を大切に捕る、趣味と実益をかねた釣り観光に着目する必要があります。九州、関西、東海、関東エリアでは、漁業者が釣り観光に転向することによって、より大きな収益をあげています。大都会に住む大人や子供たちにとって、海という大自然の雄大さにふれた時の感動、釣りを通して魚と出会える喜びは貴重です。海を受け継ぐ若者が減りつつある中で、若者を引き止める魅力ある先進的な漁業に転換させる方法として、釣り観光などの海洋観光趣味産業への転換も一案です。

最近海の開発がだんだん着目されてきました。これを本格化するためには、日本国民全体が海への関心を高めて、海の開発を精神的にも具体的にも後押しする必要があります。老いも若きも子供たちも海に出て海と親しくならなければ、海の開発は国民規模では進まないでしょう。父母は自ら海に出かけると共に子供たちに海での楽しい思い出をつくってあげることが大切です。家族が一緒に海で何らかの趣味生活をすることが、海洋を切り開く国民的底力です。子供たちは人生の進路を選択する時、海を一つの選択肢として考えることができ、海で囲まれた日本の未来を支える人材となります。今は極端に聞こえるかもしれませんが「日本国民全てが海に出かける」必要があります。それほど、海への関心、海での体験は将来の日本にとって重要なことです。ここにも私たちが安全安心な趣味生活ボートを造り、みんなで海に出かけようと発信する動機があるのです。

日本三景の一つ松島周辺では７０００年前の縄文式文化が今もみられます。相馬海岸はオーストラリアのゴールドコーストにも匹敵し、リアス式三陸海岸はどこをとってみてもその美しさは喩えようもありません。この美しさを都会のビルのジャングルで生きる日本人だけでなく、世界の人々にも、堪能してもらいたいと願っています。釣り観光、趣味労働、趣味観光生活をすることが人々の究極の願いです。大自然は、もし私たちが大自然を正しく愛し管理するなら、一人も飢える人がないように人々を迎え入れる豊かさを持っていると思います。

復興再生に影をおとす防潮堤

「第一号復興ボート完成進水式」を行った直後の２０１４年10月21日、私たちは石巻市副市長さんにお目にかかり進水式の報告と私たちのゴールについてお話する機会を得ました。その時、防潮堤建設計画が石巻市でも着々と進んでいることを明確に知りました。副市長室の壁には、防潮堤建設予定を記した港湾図が掲げられていました。石巻市の海岸はほとんど5メート

ルの防潮堤が建つ予定だとのことでした。私たちは「海岸線に沿った5万坪の土地に海洋趣味産業基地を展開する計画」を副市長さんに紹介しました。「このように防潮堤が建つので海岸線の5万坪確保は難しい。ですが何とか探してみましょう」という前向きで暖かいお応えをいただきました。しかし「海との共生」「海の視点に立った復興再生」、海岸線を生かした海洋趣味産業基地構想を実現しようとしている私たちにとって防潮堤計画は行く道に影を落としました。そして防潮堤に反対している、海で生きる人々の声を聞くことになりました。

気仙沼市民による「防潮堤を考える会」

気仙沼市の「防潮堤を考える会」は「東北海岸と太平洋沿岸、日本全国にコンクリートの巨大防潮堤建設が進みつつある。一体何を守るためか」と声をあげています。何故なら、岩手県気仙沼市小泉地区には、高さ14．7m、幅80mのコンクリートの巨大防潮堤が計画されており、小泉地区だけでも総工費は200億円。東北海岸405ヶ所、370kmにわたって防潮堤が建設される予定。その総工費が8000億円だという。防潮堤の高さは5m～15．5mで5階建てのビルの高さになる。

「防潮堤を考える会」は、「地区によっては津波から守るために防災政策が必要。しかしなぜ、600kmの東北沿岸部の全てに一律にコンクリートの巨大防潮堤がなければならないのか」と訴える。被災地は犠牲になった方々への祈りと深い郷土愛に基づき「持続可能な街づくり計画、より安全で耐久性に優れた、それぞれの地域に一番効果があるとみなされる独自の防災計画」を一生懸命に考えたという。気仙沼市震災復興市民委員会が進めていた防災計画は「海と生きる」である。「環境保全型都市」をめざすことを決め「避難の意識」「後世に持続可能な減災計画」を決めていたといいます。

しかし2011年9月、「海と生きる」ではなく、コンクリートの巨大防潮堤計画が政府によって発表された。気仙沼市小泉地区の防潮堤は14．7mの高さ。一人残らず高台移転する方向性の中で、誰も住まなくなった土地に総工費200億円をかけて建設される巨大防潮堤。これに対して「防潮堤を考える会」は全国各地で建設される防潮堤に疑問を抱き「防潮堤を考える会」を立ち上げ、防潮堤について有識者を呼んで勉強会を繰り返し、結果として、気仙沼市長、宮城県知事に「防潮堤建設再考」の要望を重ねてきた。宮城県本吉郡南三陸町は高台移転を最優先して「防潮堤建設再考」を可決している。

コンクリートの防潮堤が生態系に与える影響も深刻である。海と山の織り成す素晴らしい自然や地場産業を支える豊かな水体系に、コンクリートの防潮堤が与える影響は計り知れない。コンクリートは魚を寄せ付けない。50年が寿命といわれながら20年で破壊した防潮堤もある。耐久性が課題。一度建設しても永久にかかる膨大な維持費が大きな懸念。高さ10mのスーパー防潮堤のあった宮古市田老地区では、被災者3000人中229人の尊い命が失われ、防潮堤がない鍬ヶ崎地区では3200人中65人が亡くなられた。生命を守ることが目的で建てられた巨大防潮堤は、襲ってきた津波が見えなくて避難を遅れさせるだけでなく、見えない海との距離感を麻痺させ、防潮堤を越えるはずがないという安心感などから逃げる意識を薄れさせ、逆に被害を大きくする危険性を持つことを東日本大震災という痛ましい経験が教えてくれた。そしてこの防潮堤計画は、震災という想像を絶する苦難を乗り越え、自分たちの海を愛し海を心の支えとして「海とともに生きる復興」を目指してきた住民の未来を、海から隔絶してしまう。それぞれの地域の自然の特性を活かし、より安全で持続可能な防災システムを考えたい。日本の若者たちの将来にどんな影響を及ぼすか、日本の将来を左右するこのとてつもない計画を再考する必要がある。（Youtube　防潮堤を考えるThinkSeawall）――このような内容で気仙沼市民は「防潮堤再考」を訴えています。

海の幸の宝庫・奥尻島の防潮堤/北海道南西部日本海

内閣総理大臣夫人安倍昭恵女史によるメッセージ

2014年9月25日にニューヨークフォード財団で行われた安倍昭恵女史の講話をご紹介いたします。「気仙沼というところが日本の東北地方にあります。いくつもの歌に歌われる風光明媚なところです。新鮮な魚介、海の幸に恵まれています。あるとき、その海の幸は山から流れてくる養分に依存していることに気づいた人たちが現れます。森を育てない限り海の水を豊かにできないこと、美味しいカキは育たないことに気がついたその人たちは、進んで陸に上がり、森に木を植える運動を始めました。NGOをつくり、それを「WDS」「森は海の恋人（Woods, the Darling of the Sea）」と名づけます。2011年3月11日、そこへやってきたのが、あの恐ろしい津波でした。気仙沼は最も甚大な打撃を被ります。そして今、高くて頑丈な防潮堤が海と陸とを切り離すかのように海岸沿いに張り巡らされようとしています。このままでは海に流れ込む伏流水が断たれ、海にとって大切な滋養の源である森とのつながりが細ってしまうとWDSの人たちは真剣に憂慮しています。

あの日、東日本を襲った巨大な地震は大きな津波を起こして多くの命を奪いました。それは辛い、本当に辛い体験でした。皆様方米国や世界中の方々が、あの時差し伸べて下さったご支援くらい、私たちにとって嬉しく心を温めてくれたものはありませんでした。高い壁を建て海岸線を覆い尽くす選択をすることは、未来の世代に対して本当の意味で、正しい責任を果たすことになるのでしょうか。防潮堤は、たとえどんなものでも民主主義的手続きを経て住民の代表たちが議会で承認しない限り建ちません。

私が見る限り防潮堤にはいくつかの深刻な問題があります。高い防潮堤があると、確かに安心だという心理を生むかもしれません。言い知れない不安を経験した人たちにとって、この安心という要素は、とても大切なものなのだろうと思います。半面、いつも海を見ることで知らず知らず身につく海の表情を読み取る習慣は、人々の感覚を研ぎ澄ますうえで大切なのだという人がいます。

海を見えなくしてしまう防潮堤は、皮肉なことに、むしろ住民に油断をもたせてしまうかもしれません。事実、今回の事例をみると、高い防潮堤があった地域の住民から、逃げ遅れて亡くなった人がたくさん出ています。そして津波に対するベストの対応は、マタイ福音書第24章が述べているように「山に遁れよ。屋の上に居る者はその家の物を取り出さんとして下るな。畑にいる者は上衣を取らんとして還るな」なのです。海を見えなくすることは、危機に備える感覚を鈍らせてしまうのではないか。これが問題の第一点目です。

防潮堤はコンクリートでできています。コンクリートの耐用年数は多く見積もって60年です。ところが備える対象の津波は何百年に一度という規模のものなのですから、ひ孫の、そのまたひ孫の世代まで、補修のため、おカネをつぎ込み続けていかなくてはなりません。一度建てるとそういうことになります。負担するのは地元の自治体です。そのうえ、今度の津波を経て海岸部の住宅は丘の上に移転することになりました。壁が守るはずの海沿いに住民はあまりいなくなります。無人の土地を守る防潮堤は誰が補修するのでしょうか。つまり、防潮堤のライフタイム・コストを、どう賄うのかという問題もあります。

それから勿論、海が見えなくなる高い壁で海岸を覆ってしまうことは景観にとって大きなマイナスで、観光の振興にもよい影響を与えません。こうした、ためらい、逡巡が少なくない人々の胸にわだかまっています。いつしか急いでつくろうとする人も、少し待ってほしいという人も、どちらも、どこまでも善意にもとづき、それぞれの立場で良かれと思って活動しているのに両者の間に、もうひとつ、心の壁ができてしまいます。

そういう事態になるくらい悲しいことはありません。防潮堤という壁が文字通り、人々を分かつものになってしまうなんて、思うにつけ、いてもたってもいられない気持ちになります。森と、海と、人と、それぞれが、それぞれを慈しみあって、豊かにしあっていく共存の道を、私は探っていきたいと思っています。海とは時として恐ろしい津波を起こすのだとしても、森を海の恋人とし続けていくために、自然と人とが調和のなかに生きていくために、何がいい解決策なのか考え続けていきたいと思っています。皆様のお知恵をお貸しください。」

（The High-Level Symposium on Coastal Resilience at the Ford Foundation Sep 25,2014）

真の復興再生とは

防潮堤問題は東日本大震災の復興策として、私たちが考えなければならない実に深刻な差し迫った課題です。海岸線に囲まれた日本に住む私たち国民すべての精神的具体的生活に影響を与え、後の世代にも影響を与え、今後の「海洋国家」日本の死活問題にかかわる問題です。私たちはこの防潮堤問題を対岸の火事と捉えるのではなく、自分の問題として受け止め、誰もが納得する真の復興再生案を探求し構築し広く提言していかなければならないと考えます。黙過すれば、２０２０東京オリンピックに集まった世界の人々は、海岸線の見えない、コンクリートの高い防潮堤で囲まれた、魚の寄り付かない海を抱えた日本を見ることになります。２０２０東京オリンピックに集う世界の方々にとっても希望となる「真の復興再生」を成し遂げなければなりません。

（照国）

希望溢れる
「圓母平愛友好協会」
創設へ向かって出航

理想的な文化文明を形成する3要素

現代世界は経済の自由化やＩＴ産業、航空産業など交通手段の飛躍的発達によって急速にGlobal化し、超国家、超民族、超宗教の一大家族社会を渇望している時代と言っても言い過ぎではありません。「イスラエル・パレスチナ問題」、「アラブの春」、「イスラム国、イラン・イラクに象徴されるイスラム問題」、「ウクライナ問題」、「ギリシャ問題に象徴される破綻していく経済問題」、「キリスト教の象徴イギリス、アメリカの道徳的退廃を背景とする凋落」、「共産主義唯物論の崩壊」、「環境問題」、「食糧、エネルギー問題」、「自然災害問題」など、山積する問題が噴出し現代物質文明の危機が叫ばれる中であっても、人類歴史は確実にひとつの焦点に向かって流れています。それを集約して「環太平洋時代の到来」あるいは「20世紀は油の世紀、21世紀は水の世紀」という言葉に象徴される所以（ゆえん）です。

文明の崩壊は、「文明の出発点」、「人間が生活し文化文明を形成する原点」に関わって起きてくる問題です。理想により近い新たな文化文明に発展するために興る、不可避な産みの苦しみとしての崩壊現象であると言えます。それでは「人類にとって理想的な文化文明の出発点は何処か、その文化文明は如何なるものか」と問う時、人間生活の最適地のための条件が備わり、理想の文化文明を決定、あるいは形成する要因を備えた場所に発祥する文化文明です。それではその文明は如何なる文化文明であり、地球星の文化文明の中心地は何処でしょうか。

概ね人類は、文化文明の中心地として北緯30度から40度に位置する場所を選んできました。イタリアの首都ローマがそうであり、イギリスの首都ロンドン、アメリカの首都ワシントンD.C.やニューヨークがそうです。そこでは春夏秋冬が調和しているからです。同時に人類は生活の最適地として、海と陸が調和し重なり合う所、すなわち海岸線の長い所、すなわち、半島とか湾とか、大陸に近い島などに文化文明の中心地を築いてきました。人間は海を大切にし、海を基盤にして生活するためです。

同時に、人間生活にとって食文化が一番重要です。国連のＷＨＯ（世界保健機関）は、90年代前半から「日本人の健康寿命が一番長いのは、魚介類の蛋白質をより多く摂っているからだ」と常に発表して来ました。そのため、90年代中半期より、肉食中心文化のアメリカも魚食文化中心に急速に変わりはじめ、今ではアメリカ人は沢山の魚を食べるようになりました。森や大地の高質な栄養素は、雨や河川によって湿地帯や海の大陸棚に運ばれます。魚介類はその蓄積された栄養価の高い水域で成長するため、魚介類の蛋白質が人間の健康にとって最高の健康食となるのです。

すなわち、「春夏秋冬の調和した所、海と陸の重なり合う所、栄養価の最も高い食糧の生息する所」が文化文明の中心地を決定する三要素になります。空中や宇宙、陸や海のど真ん中で、人間が豊かで高い文化文明を構築できる所はありません。こういう観点で考える時、まさに文化文明の中心点としての三要素を最大限に備えているところ、すなわち、地球規模の文化文明の原点となるところは、私たちの住んでいるこの日本・韓国を中心とする北東アジアとパラグアイを中心とするパンタナール、ウルグアイなのです。

この二極地が、今日までの文化文明の変遷史が到着する最終地であり、この地域が、今後の新しい文化文明史の出発点になります。この二極の文化文明の原点を結ぶことによって、最終的には新しい文化文明が地球規模に拡大波及していきます。このような観点に立って、「日本・パラグアイ圓母平愛友好協会」を結成する運びとなりました。その動きについて次にご紹介したいと思います。

パラグアイという国は、反米容共国家群の多い南米・中南米の中でも、唯一、親米反共国家でありながら、上記

の三条件に最も叶っているもう一つの国であり地域です。世界で最も貧困で飢餓率の多い国でありながら、精神的には世界で最も豊かな幸福感を享受し自殺者のいない国です。日本は経済的に最も豊かな国でありながら、15才から35才までの若者の自殺率が先進7ヶ国中、一番高い国です。また、日本とパラグアイとの関係は特別な関係にあります。日本がＯＤＡを1人当り最も多く援助してきたのがパラグアイです。地球でみるとき日本のちょうど正反対に位置しています。これまでのような出発点の間違った文化文明ではなく、このパラグアイに世界で最も高度な理想的文明を開き、日本とパラグアイが、地球規模の文明の両軸（両極）となり、崩れゆく現代文明の受け皿をつくろうというのが友好協会のめざすところです。

友好協会の名前は「日本・パラグアイ圓母平愛友好協会」です。「圓母平愛」に込められた意味に本質が込められています。これは「大海のように平等で滋愛に満ちた円満な母、円熟した母のように」という意味です。２００４年６月28日「ＮＰＯ法人　世界平和海洋訓練教育協会」、「日本を真の海洋趣味産業国家に育てる会」、「㈱海洋平和」が共催で、パラグアイからクーラック元商工副大臣を招待し、この会の設立準備会を出発させました。日本では今年６月27日に東京都千代田区平河町の「都市センターホール」で、パラグアイでは今年10月14日に設立式を執り行う予定で準備を進めています。

日本・パラグアイ圓母平愛友好協会設立趣旨（案）

【世界は今、民族の対立、宗教の対立、国家の対立、また、環境や公害そして貧困、格差などの諸問題で病んでいます。ウクライナ問題、イスラム国問題、イスラエル・パレスチナ問題、テロ戦争、アラブの春と、その後に続く混迷などを通して、これからの世界を照らす指導理念はどこにもなく、明らかに「大患難時代」に入っています。しかし、諦める必要はありません。人類は確実にグローバル化、人類共同体、科学の極度の発達など、人類一家族とも言うべき世界に向かっています。今日の世界で不足しているのは、人類一家族の中心たり得る父母の存在が不在である事、または確認出来ない事、これを主導する理念がない事です。

中東、アフリカ、西欧の問題は歴史的に見れば、今までに解決すべきであったものが未だに解決できていないために、それを克服できる未来の希望が見えないために、今もなお呻吟し苦脳している過去の課題です。これからの希望は環太平洋の中心「北東アジア」にあります。しかし、そこに至るまでのアメリカの役割が重要です。アメリカが北東アジアに連結されてこそ世界はいち早く一大家族社会に転換されていく事でしょう。

ここで問題になるのは南米です。南米は北米と同じ様に西欧から南アメリカ大陸に渡ってきたアメリカの友邦であり兄弟です。プロテスタントとカトリックの違いはあっても同じキリスト教兄弟圏です。アメリカは海洋国家日本と共に南北格差（経済格差）の問題を解決してからアジアに来なければなりません。南米の地勢学上の中心はパラグアイです。南米諸国の中で最も貧困でありながら幸福感を最も享受している国です。パラグアイと日本の歴史は特別です。パラグアイのグアラニー族は蒙古斑点を持ち、１５０００年前の縄文時代の日本人がその源流とも言われています。日本がＯＤＡ援助を行った国で、一人当り一番多い国がパラグアイです。南北アメリカが日本を通して北東アジアに繋がれば、人類の未来が開けてきます。北東アジアが新しい環太平洋時代の中心です。日本人が満州平野と呼んでいる「中原天地と韓半島、日本」と「パンタナールとパラグアイ、ウルグアイ」は地球星の文化文明の中心地となり得るすばらしい場所です。私たちは、日本とパラグアイが水や魚を中心として一つになることによって、地球規模の諸問題が全て解決しうると考えます。

よって、私たちはここに、海水の如く、隔てなく格差なく人々を愛する父母の慈愛を価値の中心においた「日本・パラグアイ圓母平愛友好協会」を設立する運びとなりました。道徳的退廃と闘争と殺戮戦に明け暮れながら、有史以来連綿と続いてきた、「陸上偏重型文化文明」を克服し終息させ、目前に迫り来る食糧問題、環境問題を根本から解決し、持続発展し続けることの出来る水や海を基盤とした「世界的規模の新しい文化文明」の両軸をつくる決意を致しました。よって今日、ここに「日本・パラグアイ圓母平愛友好協会」の設立を宣言いたします。】

２０１５年６月27日　都市センターホテル

（飯島）

地球上の文化文明の中心を決定する

文化文明の両軸（二極）は地軸の真っすぐの対極に位置

【北東アジア 日本・韓半島・中原天地（満州）地域】
【南米パンタナール・パラグアイ・ウルグアイ地域】
この地域が地球星地球村の超民族超宗教超国家
一大家族社会の地球首都となる

世界の釣り 日本の釣り

剣崎

釣り人の聖地 剣崎・松輪

縄文時代から丸木船に乗ってマグロやクジラなどの大型魚を捕獲していた神奈川県三浦半島。その南端にみうら漁協剣崎・松輪地区がある。

東京湾と相模湾の中央に位置する船宿の盛んな剣崎漁港。この漁港には間口港と江奈港があり、江奈港を拠点とする地区を松輪地区と呼ぶ。

この地区の船宿は23軒、所有する船の数は全部で60隻を越える。船宿経営が始まってから大体50年になるという。昭和30年代、一本釣り漁師から切り換える方が現れた。その当時、船に乗り切れないほどの釣り客が殺到し、個人経営から家族・親族で協力して従事するようになった。更に、客のニーズに応えるために、船を買い換え、3年で船の元が取れるほどだったという。

現在、ここで使われる船は全て特注、1隻5000~7000万円。一番高い船で1億円。船の大きさに合わせてエンジンやソナーなどの設備も揃え、客の安全と釣りの楽しみを提供している。

今回利用した船宿の一義丸は、19トン大型（21トン級）快速船840万馬力など合計4隻を所有する。

取材協力してくれた瀬戸丸には8人乗りの仕立て船など3隻を所有する。

一年中釣りができる資源豊かな海。黒潮と東京湾系水のぶつかる海域で、年間を通して真鯛・マアジが釣れる。春は太刀魚・ヤリイカ・メバル。夏はイサキ・マルイカ・カサゴ・シイラ・サバ。秋はワラサ・イナダ・松輪サバ・メジマグロ・カツオ。冬は石鯛・カワハギ・太刀魚・ヤリイカ・メダイ・底物（カレイ等）が狙える絶好の釣りポイントとして人気だ。

さらに漁場が近い。出港直後にカワハギ、他の漁場も30分もあれば到着でき、釣り時間が多く取れるのも魅力となっている。

乗合船の釣りに初挑戦

11月30日早朝、自分の希望する船の座席番号を取り会計へ。「ワラサ・マダイ船ですね。大きいのを釣って魚拓を作りましょうね！」明るい女将さんが座席番号の印字された乗船券と声援をくれた。

港では大勢の釣り人がごった返していた。付け餌、仕掛けなどを購入し、自分の乗船する船へ。スタッフに乗船券を見せ、場所を確認。乗合船では、受付した場所にずっと滞在する。その場所で釣りをし、食事もすることになる。

朝7時、一斉に船が出港する。この日の遊漁船は50隻ほど。客層もスタッフも男性がメイン。20代から70代と幅広い年齢層。客のほとんどが一人参加だ。

月明かりの下で、黙々と釣りの準備を進める。座席は船から海を見る形でほぼ等間隔になっている。背中側には船長の居る操縦席のある部屋で、反対側の様子は全く見えない。

日が昇り始めた。海と朝日しか見えない中、波を切って走る事10分。船が止まる。船長のアナウンスで指示棚を確認し、一斉に竿を下ろす。聞こえるのは波と風と息遣いだけ。

じっと魚を待ち続け、餌を食べたら合わせ、リールを一気に巻き上げる。ワラサは群れで泳ぐ回遊魚。一人が釣り始めると、一気に活気付く。

リールを巻く音の響く中、「タモ（網）取って！」の声。瞬時に人々が反応する。見事な連携で網が渡されて行く。ワラサ3キロ、真鯛1キロ、イナダ1.5キロ。良形の魚

が次々上がる。釣り客は興奮の渦にドンドン引き込まれる。ワラサ釣り初心者ながら1匹釣る。周りを見ながら準備し釣りをする。教えてくれる人は居ない。個々が個々に夢中で釣りをしている。数分もしないうちに群れが去ったか？一気に静まり返る。再び船長のアナウンスが入る。「移動します。」一斉に竿を上げ、次の漁場に移動する。これを数回繰り返し、帰港時間になる。

釣りではしばしば、釣り糸同士が絡(から)むオマツリという事が起こる。潮の流れの激しい変化や、動き回る青物釣り、混み合う釣り場では、オマツリが起こりやすい。5～6本の釣り糸が絡む事もある。船の全体から糸が出ているので、糸を引っ張って合図しながら大声で話す。反対側の釣り客の顔は見えないので、聞いていてくれると思って糸をほどきはじめる。「この竿の方は糸が出すぎ。少し巻いて！こっちの竿の方は、まだ巻かないでよ！」「痛てて！針が刺さった！糸をほどいてるんだよ！この竿の人！巻かないで！」「すみません～～。」かすかな謝罪の声が聞こえる。周りでは次々釣り上げているので、焦る気持ちが伝わってくる。

しかし、ほどけないと釣りができない。我慢してじっと待つ。「はい！この竿ＯＫよ！」感謝して針を引き寄せ、再び餌を付けて釣り再開。

しばらくして、再び船長のアナウンスが入る。「終わりです。帰港します。」今度は片付けに追われる。

船が港に着く直前、スタッフの方々が貸し竿などの備品とゴミを素早く回収する。

下船すると、右舷と左舷では釣れた量が5倍は違っていた。閉まらないクーラーボックスから4キロほどのワラサを2尾出して、梱包用の発泡スチロールに移し宅急便の手配をする方もいた。釣果の報告会があちこちででき、再び港はごった返している。次々と船が戻って来る。片付けを終えた方から速やかに帰路に着く。あっという間に駐車場が空になっていた。

船宿密集地の知恵「正直と信用が第一」

今回、2つの船宿の方にお話を伺う事ができた。一義丸の船宿には天井も壁も魚拓が貼られている。「これは10月に釣れた真鯛で、20キロよ。」女将さんが誇らしげに説明をしてくれた。2時間ほどして船長が戻られた。船の掃除や明日の準備をしてきたそうだ。下船後も新聞各社や釣具店、雑誌などに釣果情報を提供する仕事があるという。「ネット関係は息子がやってくれるので助かるよ。」「生活できないようなら、息子には勧められないよ。」船宿経営での生活は安定しているようだ。

子供たちがおやつを頬張る姿も見え、孫の笑顔で英気を養うという。

瀬戸丸の船宿に行くと、女将さんが温かいお蕎麦を出してくれた。身も心も温まるサービスに感謝する。カワハギ釣りに乗船したおしゃれな若い女性のグループが釣りの話で盛り上がっている。場が一気に和む。

景気の影響がすぐに反映する厳しさもあるが、「正直と信用が第一」。日々の努力は惜しまない真っ直ぐな船長は、仲間も大事にする。

この地区の利点を伺うと、協力して船宿経営ができる事だと言う。客が乗り切れない時は他の船宿を紹介したり、釣り大会などのイベントを企画したりと、活発に交流。「先月の女性だけのカワハギ釣り大会には１００名以上参加したよ。」釣り雑誌に特集も組まれた。

夏場には子供連れの家族がアジ釣りを楽しむという。「これからのシーズンは空気が澄んでとても綺麗な富士山が見られる。楽しみが増えるよ。」「もっと多くの方に海に来て欲しいね。」海の魅力は語りきれないと、船長さんも女将さんも微笑んでいた。

瀬戸丸：0468-86-1917
一義丸：0468-86-1453

横浜

スポーツボートとは

日本最大のマリーナと呼ばれる神奈川県・横浜ベイサイドマリーナ。アジアからの観光客も訪れ、年間を通してボートショーや釣りトーナメントなどのイベントも盛んな人気のマリーナである。

ここにホビーワールドマリン横浜支社の事務所があり、当社のボート、グットゴーＴＥ２８１０（全長30フィート全幅9フィート3インチ、11人乗りのスポーツボート）を係留している。

株主や釣りクラブ会員・国民海洋基金会員がクルージングや釣りを楽しんでいる。

ボートの運行は男性のキャプテン(船長)と女性のマネージャーの2人が担当している。

ボートについて伺うと、遊漁船のチャーターボート(少人数の貸切船)に使われているのと同じ仕様の船だという。「気の合う仕間や家族と、アットホームな雰囲気でクルージングや釣りを楽しめるのが魅力です。」とキャプテンが教えてくれた。

次に客層を聞くと、初めての乗船、初めての釣りという方が多く、大半が女性だという。

初心者でも釣れる!

どのような工夫をされているのか伺った。

「服装のアドバイスや船酔い対策(前日の体調管理方法)もお伝えしています。」

「初心者の方には竿の持ち方から教えています。」

「初心者でも釣りやすい座席があるので、本人にお話して確認してから案内をします。」と回答があった。

男女ペアの体制は好評だが、同性どうしの方が話しやすくて良い、釣りを紹介してくれた友人も乗船するので「安心する。」という声もあるそうだ。

初めて釣りに参加する方が事務所に来ていた。家族から借りた竿を使うという。キャプテンが竿をチェックし、使い方のレクチャーが始まる。「この竿は投げ竿ですね。こちらの竿の方が使いやすいですね。」一つ一つ笑顔でゆっくりと丁寧に説明し、「船の上でもう一度説明しますから、忘れちゃっても大丈夫ですよ。」と言って5分ほどで終了した。

次々お客さんが集まる。最低3人で出港し、今日は5人だった。釣りの準備をしてマリーナへ移動する。

船に乗り込んでほどなくすると、夜景から日の出に景色が変わる。「毎日(景色が)違いますよ。飽きないですね。」操縦しながらキャプテンがつぶやく。操縦席は仕切りが無いので、スタッフと会話できる。

「あの三角屋根は八景島です。」「向こうの明るいのは木更津ですよ。」漁場に移動中も観光気分を楽しめる。

船が止まり、アンカーを下ろす。黒色形象物を掲げる。キャプテンから指示棚を教えてもらい、仕掛けや餌を付けて、竿を下ろす。初心者が多いので、今回は釣りやすいアジ釣りだそうだ。コマセ釣り、ルアー釣り、タイラバ釣りなど、それぞれの釣りたい方法で魚との勝負開始。マネージャーは餌をアオイソメ(虫)にしてアジを狙うようだ。

釣る座席にも、工夫がある。初めての方は、釣ることだけに集中できる座席を勧めてくれる。

波が高く、小さいアタリが分かりにくい。「それ、引いてますよ。」と教えられリールを巻くと金色のアジが釣れた。誰かが釣れると、その様子もすぐ見れる。なかなか釣れなくてもアドバイスを貰って、すぐ挑戦できる。

イージス艦や大型船、漁船。他の船が近くを通過する時は「右舷側に引き波が来ますよ。」と教えられ、体を固定し波に備える。

「今日は絶対釣って帰る!」一対一でマネージャーからレクチャーを受けた釣り2回目の婦人が50㌢の真鯛を釣り上げた。アジ用のライトタックル(軽い竿)だが、釣り方のポイントが分かれば、こんな嬉しいサプライズも可能に。釣り上げた本人は、涙を流して喜んでいた。

それを見ていた周りの方々は刺激され、「真鯛!真鯛!」と念を込めて釣りをする声も聞こえる。この船は、360度釣りが可能な設計で、自由に移動して釣りを楽しめる。特に走る青物には最適だという。

途中、雨が降ってきた。寒さを感じていた方はキャビン(ドア付きの小部屋)に移動した。キャビンは、ソファと小さなキッチンやトイレがあり、着替えや休憩だけでなく、荒天時の避難場所にもなる。

「終了です。」船長の合図で糸を巻き、竿を上げ、帰港する。

波を切って飛ぶように走る船。体を固定できれば、好きな座席に座ってよい。船尾の波や周りの景色、操縦するキャプテン

と同じ景色を眺めるのも可能。また釣果の話をしたり、写真を撮ったりと様々に帰港までの時間を過ごす。

マリーナには魚をさばく場所がある。（サバなどは船上で処理をする。）ここには、保存用の氷やゴミ箱も用意されている。魚をさばいたことが無くても大丈夫。経験者と一緒にさばく練習もでき、おすすめの料理法も聞けるので、帰宅後の料理の不安も解消する。

せっかくだからと、パッパッと慣れた手つきで刺身盛りが完成していた。刺身盛りを囲んで皆で過ごす時間も、笑い声が絶えなかった。

乗船前は、海は怖いと言っていたお客さんから、「次は何を釣ろうか？」そんな会話も聞こえてくる。性別・年齢・国籍を問わず、釣りは魅力的なようだ。

このマリーナのある横浜は東京湾の内海にあたる。内海の波は外海に比べると穏やかなので、家族連れや初めての釣り・クルーズに利用する方が多いそうだ。

ここも年間を通して様々な釣りが楽しめる。お客さんの体力やニーズに合わせて、アジ、サバ、ワラサ、イシモチ、真鯛、カワハギ、太刀魚などを狙うという。

海で生まれ変わる

海の魅力について、マネージャーにお話を伺った。

「海に船で1時間だけでも出た。それだけで、人間は解放され変わることだってできるのですね！」「生まれ変わったようです！」という感想や、表情が物凄く明るくなる方もいる。海の凄い力をお客さんから教えてもらうことの方が多い。更に、海の魅力を知ると、「船酔いしても海に行きたい！」というお客さんの声もあるという。

想像を超越するほどスッキリした表情を沢山見てきたので、「陸上で百回議論し合うよりも、一回船に乗って海に行く方が良い！それぐらい乗る前と後では違いますよ。」と力強く語ってくださった。

次にキャプテンにお話を伺った。いろいろな釣りが出来るのはスポーツボートの魅力の一つだそうだ。コマセ釣りは初心者でも簡単に釣れる。しかも、いろいろな魚が釣れるので釣る側には良いのだが、魚の乱獲や環境汚染の原因にもなるという。

アメリカなどでは生き餌釣りやルアー釣りが主流で、生き餌はとても安価に買え、無駄が少ない。また、ルアー釣りの方が難しいので、釣れた時の感動が大きく、魚を守ることにも繋がる。そして何よりも、釣りそのものをスポーツとして楽しんでいるという。生き餌釣り・ルアー釣りの文化が日本にも広がれば、もっと環境にやさしい趣味になるのでは？と、若いキャプテンから未来を見据えた話を伺えた。

HWM釣りクラブ：045-353-8475

（峰尾）

アメリカ

パーティーボート（乗合船）

漁船の改良利用ではなく、クルーザーやフェリーから改良し発展させた船なので、居住性や釣り人の自由性が大幅に保障されている。１００人程の釣り人が乗合いできる。

釣りは自由。しかしターゲットの魚によって、皆殆ど同じ釣り具を使用し、同じ釣り方をする。

中央に大きな部屋があり、そこでコーヒーを飲みながら談笑したり、休憩したり、釣り具の準備もできる。地下階にはベッドもあり、遠出や宿泊も可能。屋上では日光浴をしたり、海の風景を楽しむことが出来る。

船長やメイト（乗組員）は、殆どが漁船のキャプテンとメイト出身のため彼らは魚のスポットをよく知っている。お客さんが釣った魚を買い上げて販売することも出来る。

料金は1人1万円、沖合いのマグロ釣りは2万円、よく釣る人は経費以上の収入がある。朝6時に出航して、2時頃、港に帰ってくる。

港には釣り具店や餌屋さん、ボート器具、海や魚に因んだ装飾品販売店、ボート修理店、シーフードレストラン、魚小売店、瞬間冷凍・地方発送設備などが完備している。もちろん、小さなチャーターボート（貸切の釣り船）も多く停泊している。

時事解説

環太平洋時代の到着期に於ける米国と日韓を中心とする北東アジアの役割

米口は極東太平洋地域に政策をシフト

21世紀に入り、時代は急速に環太平洋時代に入って参りました。環太平洋圏のGDP比率も60％を越え、その勢いは増しています。アメリカ、日本はもちろん、中国、ロシア、韓国、オーストラリア、メキシコ、ニュージーランドなど環太平洋圏に位置する国々、そしてその周辺国家の世界に対する役割も大きくなっています。既にオバマ大統領は2009年、「米国をアジア太平洋国家の一員」と位置付けてアジア重視政策を打ち出し、同地域で米国がリーダーシップを維持・強化していく決意を表明しています。加えて2011年11月17日にはオーストラリアのキャンベラでアメリカの安全保障政策、外交政策、経済政策等の重心を欧州から環太平洋圏に振り向けるシフト宣言を行いました。また、世界の耳目はアメリカの愚策によってウクライナに釘付けになっていますが、プーチン大統領も2012年5月21日、「極東開発(発展)省」を新設して、西欧圏から極東太平洋地域に大きくその政策をシフトしています。まさに天運が環太平洋圏に到来していると言っても過言ではないでしょう。

そのような状況下、表面的には北東アジアでは過去の歴史や思想の観点から、各国家間、民族間で内包している矛盾が相克するという形でますます顕在化しています。現在、米国の戦略国際問題研究所(CSIS)や中国が発表している予測では、これからは米中時代に入り2030年から2050年までは米中時代が続くと予想しています。中国の習近平政権は「太平洋は広く、中国と米国が共に入るのに充分なスペースがある」と語り、太平洋の中米分割統治を主張しています。一方、北朝鮮は遂に核保有国となって参りました。日本と韓国にとっては風雲急を告げる周辺事態となっています。特に日本は、北方領土・竹島・尖閣諸島問題を抱え、ロシア、韓国、中国と国内外で対峙しています。西欧の諸問題も、中東・イスラム国の問題も過去の精算に関わる問題であり、アメリカが抱えている問題です。

危機的諸情勢と崩壊期を迎えた価値観

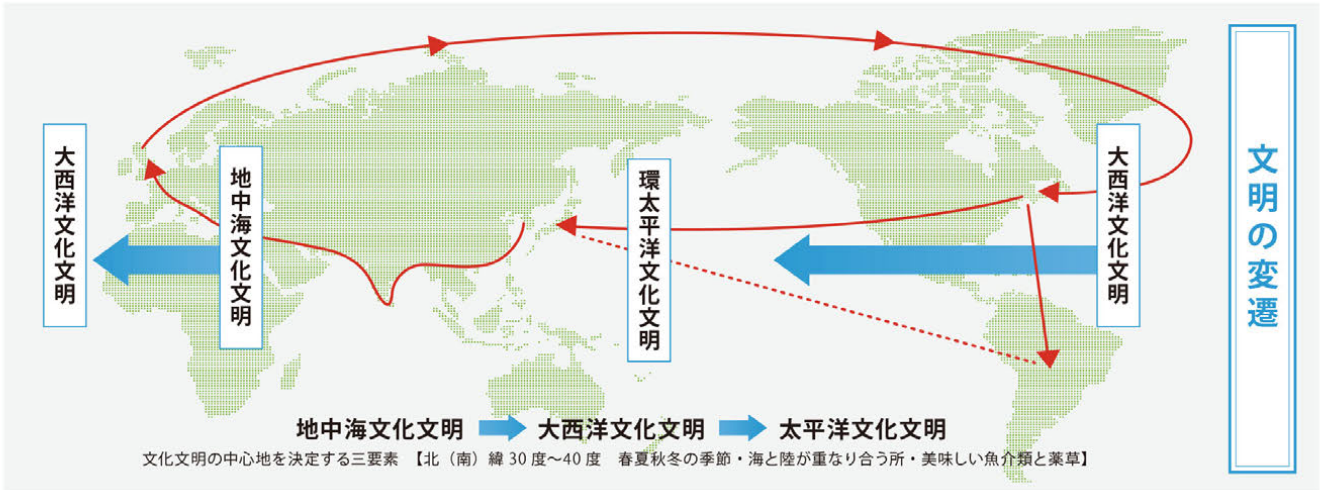
このように混迷を極めた一触即発の危機的状況下にある諸情勢ですが、私たちは次の二つの視点に目を向けて今日の世界情勢を観る必要があります。まず、第一は、過去400年余り世界を主導してきた「欧米キリスト教時代」と、これに対峙する形で台頭し発展してきた無神論信仰ともいうべき「唯物共産主義時代」が、双方とも限界に達し終焉を告げているという点です。すなわち、これまで人類歴史の叡智であった民主主義や自由主義等の価値観が全て崩壊期に遭遇している事です。第二はそれに代わり、太平洋圏を中心として、新たな価値観に基づく「環太平洋時代」が始まっているという点です。そして、この中心実体がどういうものでなければならないかということが問われます。

これまで人類の文化文明は常に「水」に立脚しながら発展して来ました。エジプトやメソポタミア、インダス、黄河などの「河川文明」、ミノア、ギリシャ、ローマ、スペイン、ポルトガルなどを中心とする「地中海文明」、続いて英国、米国を中心とする「大西洋文明」として文明は変遷してきました。これが、今、日本や北東アジアを中心とする「環太平洋文明」という段階に移ってきています。有神論であろうと無神論であろうと既存の文明は終焉期を迎え、北東アジアに新たな海洋文明の出現を予知することができます。

自由主義社会の原点は信仰の自由であり、人権が最高度に保障された神様を中心とする宗教的価値観に基づいた社会です。地中海文化文明圏の出発はユダヤ教を背景とするものでした。欧米を中心とする大西洋文化文明圏の原点はキリスト教文化文明圏であり、2000年前に明確にその役割を交代しました。現在、キリスト教文化文明圏が限界にきているという事はキリスト教そのものが限界にきているという事を意味しています。

問われる米国の南米に対する責任

では、ユダヤ教、イスラム教に代わるキリスト教がその歴史発展の役割を終えるということは、次に何が来るというのでしょうか。そ



れは、あきらかに東洋、特に日本や韓国に根を下ろし培われてきた「東洋精神文明」を根拠とする、新しい宗教的価値観に代わらなければならない事を意味しています。この新しい価値観に根ざした「環太平洋時代」が定着するまでの期間、もちろん、アメリカの責任は重大です。米国はその原点となるキリスト教をこれ以上腐敗堕落させてはその使命が果せません。特に米国は、スペインやポルトガルが230年前、腐敗堕落したローマカトリックと共に資源略奪という目的で南米に侵出して最貧国家にしてしまった南米諸国の先進化に責任を持たなければなりません。米国は、平均月収が3万円から5万円で地の底の様な生活をしている南米の先進化にも責任を持つかたちで環太平洋時代に向かわなければなりません。なぜなら南米の精神的支柱であるカトリックは、米国の精神的支柱であるプロテスタントの兄貴分です。米国は第二次世界大戦後「ニューフロンティア」を掲げ、南米の資源収奪を足場に発展して来ました。従って、兄弟国である南米の安定と繁栄に米国は責任を果たさなければなりません。

南米の中心は地政学的にパラグアイです。パラグアイは、反米容共国家の多い南米の中で、米国と特に強い絆で結ばれている唯一の親米反共国家です。この国は南米の中で中共やベネズエラの容共主義的政策を認めません。そして140年前のブラジル・アルゼンチン・ウルグアイが連合してパラグアイと戦った三国戦争の時、パラグアイ人根絶政策によってパラグアイ人が絶滅の危機に瀕しました。その時、当時の米国大統領ラザフォード・ヘイズが介入してパラグアイを絶滅の危機から守りグアラニー族を救いました。そのため今でもチャコi地方は、その州の名前を「ヘイズ大統領州」と名づけて米国を尊敬しています。このように南米で唯一の親米反共国家はパラグアイです。因みに、日本が国民一人当りにつき最も多くのODA援助を行っているのはパラグアイです。そういう意味で日本との因縁も深く、米国と日本両国にとって共通して本質的に重要な国はパラグアイです。

現在の米国がパラグアイに真の愛情を尽くすかたちで日本・韓国・台湾に来れば、アジアは米国を真の意味で大歓迎するようになっていきます。逆に、経済的利益に目が眩み道徳的退廃を内包し容認したまま、米国の国益を追求するかたちでのアジア進出では、米国を受け入れることができません。米国は、近世400年の歴史を牽引してきたプロテスタントの原点的精神を守り、最後の力をふり絞って日本・韓国・北東アジアの東洋精神文明圏と連携されなければなりません。そうすることが、米国の公式的な国家のモットー「In God We Trust」(我らは神を信ずる)を紙幣に銘記し、神を讃えながら神様に導かれて米国を建国したピルグリム・ファーザーズの精神に適うことです。

東洋精神文明が基礎となる環太平洋時代の幕開け

一方、北東アジアにおいては、日本と韓国は歴史的恩讐関係を越えて「東洋精神文明の中心基礎」が何であるかを共に探求しなければなりません。特に韓国は38度線で共産主義と同胞内で直接対峙しています。世界を代表する米ソ対決の対峙極となったベルリンの壁に代わる「もう一つの世界統一のための鍵」を握っているのが今の韓国です。日本は1955年以後、38度線で共産主義国家と対峙する韓国の後方支援国家として位置づけられ、日米安保条約の庇護の下で英国の産業革命の成果である西洋物質文明を東洋で初めて取り入れた国として発展し、戦後世界第二の経済国家となりました。今、共産・民主の思想がそれぞれの限界にぶつかって共に崩壊していく中で、当面する緊急課題は、民主主義と共産主義、及び精神文明と物質文明の統一を可能にし、東洋精神文明を基礎とし、真の意味での人間の自由と尊厳性、豊かさを保障する、新たな、より深い宗教的価値観に基づく哲学思想理念を追求することです。それによって初めて世界が抱える難問の解決策が見えてくることでしょう。

環太平洋は実に地球の半分を占め、世界最高峰のヒマラヤ山脈を背景にして、黒潮巡る広大で深遠な海洋です。すなわち環太平洋時代とは、最終的な「真の海洋文化文明時代」の到来と創出を意味しています。ロシア、中国、北朝鮮、米国、日本等を支えてきた、これまでの既存の思想が崩壊する中、「歴史的な代案」が必要です。その歴史的な代案はいったいどこで醸成され誕生するのでしょうか。

水は大地の栄養素を吸収して運びます。世界最高峰のヒマラヤ山脈から満州平野を巡って流れる河は、最高質の栄養素を韓半島や日本を取り巻く海洋の大陸棚に運び込み、その栄養素はそこに長い時間をかけて集積されています。そこには最高度に美味しい魚介類が棲息し、そこは人間が生活するための最適地となっています。「その地」こそまさしく春夏秋冬が調和し、海と陸が重なり合うこの北東アジアです。混迷と痛みの極地に達した今日の世界を導くことのできる歴史的な代案である思想理念は、この恵まれた北東アジアで醸成され誕生していく事でしょう。そしてその理念は、人間の体の3分の2が水で構成されているように、人生の3分の2を海で生活し、海を通じて新たな産業革命を興し、最高度に豊かな生産性をあげることのできる人々によって花開く「真の海洋文化文明」という具体的なかたちとなって表われるものでなければなりません。

英国はキリスト教民主主義革命を背景として産業革命を興し「海を制する者が世界を制する」という諺をつくりだす程に世界的繁栄を謳歌しました。今、この日本と韓国は、新たな宗教的価値観に基づく哲学思想理念を背景に、「新たな世紀の諺」をつくり出すことのできる海洋真文明を開かなければなりません。その文明に根ざし新たな産業革命を興し、世界全体を再生する力を持たなければなりません。2018年には中国と北朝鮮は建国後70年を迎え、必然的に「共産主義は70年を越えられない」宿命的崩壊期に入っていきます。真の海洋文化文明である「環太平洋文明」をもってそれを受けとめ包摂することのできる準備をしなければなりません。2018年まで時間はあと3年、長くても2020年までの6年です。第二次世界大戦の終戦から70年目を迎える2015年を迎えるに当り、当面の状況を維持する為には、米国政権と一体化した安倍政権の「積極的平和主義」と、正常化された韓国の政権による北東アジアの安定維持が極めて重要です。

(2014.12.12)

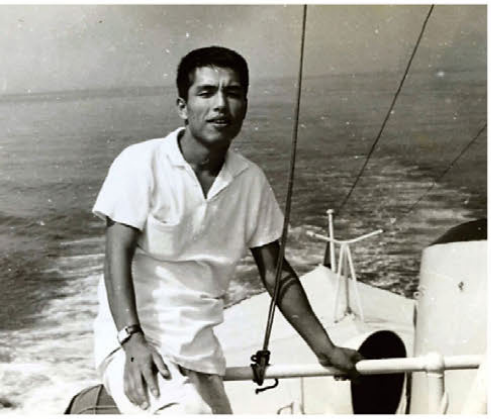
ここに人あり
KOKONIHITOARI

山崎祐介
やまざきゆうすけ

1941年　愛知県に生まれる。神戸商船大学商船学部航海学科卒。すぐに国際航路の船乗りから社会人生活を始め、約2年後に遭難。九死に一生を得て陸上に上がる。人間学、安全工学を勉強し、1998年船舶安全学を確立。2001年にインシデント（未然事故）研究により日本航海学会優秀論文賞受賞。2004年にインシデントに関する出版により住田海事・海事史奨励賞受賞。
研究業績等：主な著書8冊。国内外論文多数。甲種船長免状受有。
現状：富山商船高専名誉教授。海洋訓練教育協会顧問。富山平和大使オープンカレッジ学長。各種安全調査研究委員会委員長。安全・教育・環境等の講演等行う。現在の趣味は写真。海釣り。水泳。

アラスカ沖での遭難体験と安全工学の研究

私は、1964年9月 神戸商船大学商船学部航海学科を卒業してすぐ3年間、海運会社の外国航路航海士として働き、1985年運輸省航海訓練所助教授として練習船の次席一等航海士を1年、及び学生時代の練習船経験1年の合計5年間は、海上生活でした。通勤のストレスもなく、毎日広い海を眺めることが出来ました。この5年間というのは、同級生の中では短い方ですが、それには訳があったのです。私は海上生活に満足し、ずっと長い海上生活を望んでいたのです。しかし、ニューヨーク航路の貨物船に航海士として乗船していた時、冬期北太平洋のアラスカ沖で遭難しました。冬の北太平洋は低気圧の墓場と言われるほど大時化が続きます。その日の夜は、船体が小さい山の様な大波に「ドッシーン」と連続して激突し、小刻みに船体がブルブルと震え、船は大きく縦や横に揺れ、船殻が「ギギー」と軋む音が聞こえる状況が続いていました。私は、眠れなかったので、自室の机につかまりながら一人でウイスキーを飲んでいました。すると、午前2時頃、エンジンが急に止まり、自室前の船橋に続く階段を人々がドドッと駆け上がる音がしました。私もすぐ船橋に行きました。そして、そのとき、大時化の深夜に船首楼（船の最前部）に行き被害状況を偵察するという役を引き受けました。デッキ上に流れる海水に足をすくわれたら海に落ちて死んでいたでしょう。注意してなんとか船首楼まで這いつくばって行き、海を見ました。無数の小さい山の様な波は、強風で出来た多くの白く長い筋をつけて白く見えました。月明りだったと思いますが白い大波が暴れまわっていた光景を覚えています。もう「怖い」という段階を超えていたのでしょうか、美しいとさえ思いました。ふと下を見ると、いつもはそこから海面まで10米くらいありましたが、その時は、なんと2米程度近くに海面があったのです。大波にさらわれないように私は階段のハンドレールをしっかり掴み、茫然と周囲を見渡していました。まさに沈没してもおかしくない状況だったのです。これをフルに書くと到底紙面が足りませんので飛ばします。その後色んな困難に遭遇しましたが何とかクリアーし、緊急信号を何度も発信しながら救助船を要請しました。幸いにも船は転覆・沈没はせず、比較的穏やかな南へ船をゆっくり移動し、通常はそこから5日程度で横浜に到着できますが、あのときは、救助船と一緒に約1か月かけて横浜に戻りました。この経験が私の以降の人生のテーマ「安全」へと向けさせました。そして、翌年には勉強したいと思い立ち、海技大学校の講師として働きながら、人間学、安全工学を勉強しました。1998年船舶安全学を確立し、2001年にインシデント（未然事故）研究により日本航海学会優秀論文賞受賞、2004年にインシデントに関する出版により住田海事・海事史奨励賞を受賞しました。研究業績として、主な著書が8冊、主な学術論文（学会査読機関を経て学会論文集に掲載されたもの27編、学会論文集以外に掲載された研究論文36編）があります。



学生時代 練習船上で

海や山の自然に恵まれた富山

海技大学校に勤務していましたが、両親の介護のため、神戸市から実家のある愛知県西尾市に戻り、名古屋の長距離フェリー会社に海務課長として勤務していました。その後、両親が他界し、大学に復職を希望してもすぐにはポストがなく、1年の予定で富山高等専門学校商船学科の助教授として赴任しました。家族も一緒です。2年後、海技大学校へ復職のチャンスがあったのですが、住所を転々とするのは、子供のためにも良くないと思い富山で暮らすことにしました。大学に復職するのも魅力でしたが、それ以上に、富山に住むことで得るものがあったからです。富山には海や山という自然が豊富にあり落ち着きますし、趣味の海釣りも楽しめます。東京までは空路で1時間、大阪にはJRで3時間。静かに田舎で研究したものを都会で発表すれば、なんとかなると考えました。また、私の住んでいる射水市は、地域の絆が強く、伝統行事のお祭りにも子どもの頃か

ら参加でき、自分の子供と分け隔てなく他人の子供も教え育ててくれる、古きよき日本があります。私にとっての富山暮らしの魅力は、突き詰めれば、お金や名誉に優先するべき、本物の豊かな生活です。富山に遊びに来る都会の友人達はこの点を見抜き、みな羨ましいと言っています。

人間教育としての海洋教育

私は、青少年に、仲間とのチームワークが人生には必要だという体験や、自然の中で生かされているということを体感して分からせる教育が海でできると考え、人間教育としての海洋教育を1979年～2004年の間、高専教育の中で実施しました。私が定年退職した今でも、引き継がれて実施されています。内容の詳細は別の機会に紹介したいと思っています。成果は学生の感想文に見ることが出来ます。「泳げたが流されて体力の限界だった」、「自信が芽生えた」、「はじめてクラスがひとつになれた」、「他ではできない貴重な体験だ」、「座学では得られない現実感が得られた」、「高所恐怖症なのでデッキに立つと足がガクガク震えた」、「無理だと思っていたことが出来た達成感が忘れられない」、「自然の力の大きさや仲間と一緒にいる心強さを感じた」と言っています。こういう成果は、ほぼ毎回同じ傾向を示していました。

私は、漕艇部顧問としても、海洋教育の視点から長い間指導をしてきました。

漕艇大会の際に審査委員長を務める

カッターレースでは、クルーの息が合ってこそカッターは海上を滑るように進み成果も出ます。海では「運命共同体」という意識が共有されます。また、大自然に抱かれ、風の力だけで操るヨットの性能目一杯に大海原をかけ抜けるとき、人間はいわば「自然と一体になる」という感覚を覚えると思います。このとき、海を「場所」ではなく、「相手」と感じるようになり、海に親しみを感じ大切にしようと思うようになります。また、子供が母親の表情を読むように海がこれからどのように変化しようとしているのかを察知し、それを信じて自分の身を投げ出して海に精一杯対応します。そうしないと大変なことになります。海も一変して、怖い存在となるからです。このように、海が人間にもたらす教育性は、自然と人間、人間と人間の正常な関係、緊張感、行動力、集中力、協調性、謙遜、遵法精神等であると思われます。

外国の海洋大学と日本の海洋大学

私は、外国の多くの海洋大学に行って、これからの海洋大学構想を練る仕事にも携わってきました。1996年8月～10月の文部省短期海外研究員90日では、単身、スウェーデン、ノルウェイ、ドイツ、オランダ、イギリス、アメリカの著名な海洋大学を訪問しました。定年退職後の最近にも、フィリピン、ベトナム、インドネシア、韓国、中国の著名な海洋大学にそれぞれ短くても1校1週間ぐらい滞在し、施設、授業等を見てきました。外国の海洋大学は意外にも日本の海洋大学を褒めてくれました。それは、基礎的な学力が高く、範囲も広いとのことでした。外国では、施設や高価な教育ツールが十分に備わっており、軍隊教育的な部分も残っているように見受けられました。しかし、若干マニュアル的な教育に近い部分も感じました。

今、日本では、一般大学卒業生から海技者の希望者を海技大学校に集め、2年間教育して育成しようとする制度が発足しました。私は、日本の大学教育の基礎力の高さや深さや広さを活かしたものと考え、この制度が順調に発展することを望んでいます。船員も出来るし、営業、経済、管理に強く、経営的なセンスも持っていると日本の大手の船会社は歓迎しています。船における船長は、自動車、列車の運転手とは質が違うものなのです。海運の歴史を学べばそれが分かりますが、昔の船長は商売をしながら航海を続けていたのです。昔の商船大学を工学的な海洋大学に特化することを促進しなくてもよいと考えています。

日本は大海洋国家をめざそう

私は、退職後も人類は海洋時代の到来に際し、生き物が住める地球存続のために、自然を壊さない態度と行動が大前提でなければならないと思っています。そのうえで、日本は、単なる島国ではなく、大海洋国家を目指さなければなりません。このために、「海を分かってもらい、海を大切に思い、海を好きになってくれるためには」という視点からできるだけ分かりやすく、私なりの自然観による思想的な記述「海と人間」をまとめました。その内容は十篇で、今のところ次のとおりです。是非、みなさんに読んで頂きたいと思います。

地球と人間の歴史概観（地球のアウトラインと歴史、人間の歴史）、海があるから命がある（海の機能、母なる海）、自然と人間の関係（人間は自然に生かされている）、海は人間の心身を正してくれる（海洋教育）、日本の海底資源（日本の深海底資源）、海洋エネルギー（海洋自然エネルギー）、食糧問題（飲料水、食糧）、漁業（日本の漁業の再生）、海運（浮力のもたらした世界の物流）、最先端の海洋事業・海洋調査（日本人船員の活躍の可能性）

PR

PR

政宗と常長とサン・ファン・バウティスタ号

1613年10月28日（慶長18年9月15日）明け方、宮城県石巻市牡鹿半島月浦から一隻のガレオン船が出帆しました。サン・ファン・バウティスタ号です。船の名前の意味は洗礼者聖ヨハネです。時は約400年前、江戸時代初期、秀忠が二代将軍になり、まだ家康が力を奮っていた頃。伊達政宗は仙台藩主として、1601年、政治・経済・交通の要地であった青葉山丘陵の東端に青葉城（仙台城）を移し、内政を整え、藩制の確立や城下の統制を行い、江戸や京都に負けない5万人が住む領国造りをしていました。1611年、慶長大震災と大津波が起こります。しかし政宗は痛みからすぐに立ち上がり、より大きな理想を抱き、松島の「野蒜」に世界貿易港を造るという計画を推し進めて行きます。梵天丸と呼ばれた幼少の頃から政宗は、羽州（山形県・秋田県）の聖人・万海上人の生まれ変わりと言われるほど頭が良く知恵深い子供でした。港湾や北上川の整備、産業の振興などを行い、将来の貿易港までも見据えて復興と国造りをしていきます。そのため仙台は、政宗独自の素晴らしい領国へと繁栄していきました。

政宗が世界を考え始めたのは相馬攻めの後、海で遊び東北で親しかった北条氏照より南蛮帽を贈られた23歳の頃からでした。朱印船貿易など日本の海上交通は西に重きを置いて、皆が西を見ている中、政宗だけは東に目を向けたのです。なんと青葉城は太平洋を眺められる日本で唯一の城であったのです！当時、中世ローマカトリックの腐敗を機に生まれたルネッサンスにより航海技術が発達するにつれ、西欧人たちは船で世界に出始め宣教師達も世界に出始めました。1549年に、日本人の礼儀正しい民族性の良さを聞きつけ、ポルトガルから最初の宣教師が来日し、それからスペイン、オランダ、イギリスからも宣教師達がやって来ます。家康がスペインの宣教師ルイス・ソテロを助けたことから交流が生まれます。家康は、天正少年使節が外国船でローマへ行き持ち帰った世界地図を見て、日本も世界に出なければならないと考え大型船を造ってみます。しかしながら秀忠が命じて造った船が、浦賀の沖合い約5㎞の所で座礁し、幕府は造船もメキシコ通商も諦めます。そこで貿易船を自分の領内に寄港させたい政宗が意欲的に申し出ます。1613年4月、駿府で家康と親しく話し幕府の承諾を得て支援も受けて、月浦（石巻市雄勝町）で船造りが始まりました。

造船に携わった者達は、幕府船奉行・向井忠勝の配下で、かなりの技術を身に付けていた公儀大工与十郎やその配下の船大工たち、加えて仙台藩からは、船奉行・秋保刑部頼重（あきうぎょうぶよりしげ）と河東田縫殿親顕（かとうだぬいどのちかあき）、その配下の仙台藩の船大工たちでした。ちなみに幕府船奉行・向井忠勝とその配下達は、イギリスの宣教師であり航海士であり造船技術者でもあった三浦按針（ウィリアム・アダムス）から造船技術の教えを受けていました。スペイン人達も加わり総勢4000名以上が建造にあたったのです。実働日数45日の、出帆の前日まで続く大変な重労働

でした。こうして完成した日本初の最初の約500㌧の頑強なガレオン船、バウティスタ号は太平洋へ向かいます。

当時、47歳の政宗は、それまでの交渉能力を高く評価し信頼の厚い4歳下の家臣、支倉常長を使節に選びました。バウティスタ号は、スペイン人宣教師ルイス・ソテロやビスカイノ他180名を乗せて、3ヶ月かけスペイン領のメキシコ・アカプルコへ到着します。そこには家康が出したキリスト教禁止令の話が届いていました。そこから本国であるスペイン、そしてローマまで行くことになります。藩主である政宗の篤い思いを受け、キリスト教の布教受入れを条件に交易を成し遂げようと、粘り強く交渉を続けた常長の7年にわたる船旅でした。時化や嵐、航路も探しながらの前人未到の旅です。そのあまりの大変さと、また海という大自然の中で神秘を感じたのでしょう。船上で宣教師からキリスト教の話を聞き、神様を信じるようになった常長は、ローマで教皇に謁見し洗礼を受けます。貿易実現を信じる政宗のため常長は辛抱強く交渉していきます。しかし遂に目的は達成できず7年後1620年に帰国します。過酷な旅だった事を表すかの如く常長は重病にかかり約1年後、51歳で生涯を閉じました。一度は消えた歴史でしたが明治時代に岩倉具視の遣欧使節団がこの驚くべき偉業を発見したことを機に、政宗・常長による慶長遣欧使節は再び日の目をみる様になりました。そして大志を抱き誰も出来なかったことに先駆的に挑戦していった政宗と、自分の仕える藩主のために目的遂行のため諦めずに挑戦し続けた常長の姿が現れてきたのです。

ローマに残されていたのは、常長の篤実で一途な人柄。東北弁で話した演説も上手で人々から大きな信頼を得ていました。交渉は上手く行かなくても、とても愛されたのです。2014年10月、常長の大きな銅像のあるスペインのコリア・デル・リオでは、日本からはるばる航海して来た1614年10月5日を4世紀ぶりに再現しようと、この町に住む、スペインに残った日本人の子孫と呼ばれる、「ハポン」の名字を持つ方々約6000名が、常長の13代目子孫、支倉常隆さん（68歳）を日本から招きイベントが執り行われました。今もこの偉業を残した政宗、常長の強い精神性は、日本内外に、誇れる東北地方の方々の県民性に残っています。地方活性化が叫ばれ始めた1993年に宮城県と石巻市の人々は、このサン・ファン・バウティスタ号を復元し、関連する行事、展示会、講演会、保存などを「底力のある根気強さで丁寧に確実に」続けてきました。また困難な時には、チャレンジ精神で誠実に仕事を成してこられました。そしてこの復元船も2011年の大津波に耐え、勇気と希望を与えています。メキシコ、スペイン、フランス、イタリア、バチカン、フィリピン諸国との交流の礎も既に築いてきました。宮城県の方々のみならず、政宗・常長から受け継いだ二人の業績は、東日本の復興を願う日本中に、勇気、誇り、ロマン、大きな力を与えてくれます。2013年、使節の関係資料が、ユネスコの世界記憶遺産に登録されました。河北新報創刊百周年を記念して創設した『東は未来塾』の西澤潤一（前東北大学長）塾頭の、『私たちは、先祖の誉れと夢を思い起こすべきだ。東北にとって、太平洋は最大の資産であり、その中心地が石巻市だ。平成5年にバウティスタ号が復元されたことは、太平洋新時代の幕開けを象徴する出来事だった』（「伊達の黒船物語 - サン・ファン・バウティスタストーリー」公益財団法人慶長遣欧使節船協会10年史）と語られたことが、未来を予言させる水先案内になっているようです。

（丸山）

海水のお話

「人の体は海水で包まれている」

知ってる？海はとても大きくて深くて広い、そして美しい。なんと地球の3分の2が海なんだよ。全ての生命が、そしてあなたも実は海から生まれてきたんだよ。あなたがこの世にオギャーと産声をあげて元気に生まれてくる前の10月10日（とつきとうか）の間、ママのお腹の胎内の羊水という水のなかで、あなたは小さな魚のようにゆらゆら動きながらママからくる栄養素をもらって大きくなったんだよ。

　驚いたことに、あなたが地上に生まれてくるまで、あなたのすみかだったママの胎内の羊水は、実は海の水と同じ要素でできている。別な言葉で言うとね。この世に生まれ出るまでの間、あなたは海水の中で育ったのよ。科学者の研究によると海水の水と羊水はほとんど同じミネラルでできているそうよ。「赤ちゃんはお母さんのお腹の中で羊水という海の中で過ごしている」「大気はちょうど赤ちゃんがお母さんのお腹の中で漂っている羊水のようだ」とも言っている。確かに大気の中に湿気がなかったら人も動物も植物も大変だね。

　いつもママは不思議に思っていたのよ。むずかるあなたを胸に抱っこしてゆらゆらしてあげると、あなたはすぐに安心してスヤスヤと安らかに寝入ったの。どうしてかなと。その時、あなたはママの胸に抱かれてママの心臓や体内の音を聞きながら平和そうに寝入ってくれたの。ママのお腹の中でゆらゆら揺れながらママの心臓の鼓動を聞いていた頃と同じなので安心したんだね。あなたがママのお腹の中で聞いた体内の音と海岸でザーザーと寄せては返す潮騒の音は、きっと同じだったんだね。人間の一分間の呼吸数は18回。波が一分間に寄せては返す波の回数も同じ18回だそうよ。生まれたあと、40日目くらいから目が見え始め耳も聞こえるようになったあなた。生まれたすぐ後から、ママのお腹の中の海と同じ本当の海の上でスクスク育ったら、どうだったろうね。「一分の呼吸回数を倍にすると36で、これは人間の平均体温。平均体温を倍にすると72で、これは平常時の心臓の脈拍数。人間と海はどこか繋がっている」と言う人が増えてきてるよ。

　ところで味覚も不思議だね。ママもお料理しながら、どうして塩加減一つで味の良し悪しが決まるんだろう、甘いものにも塩を加えるとなぜ味がひきたつのかなと首をかしげていたよ。やはり海水のなかで生まれたので、味覚も塩が基本で味が決まるんだね。そうね。やはり私たち人間は海の水とは切っても切り離されない「いのちの関係」があるようね。昔から塩ＳＡＬＴは人が生きていくためになくてはならないものだった。人が生きていくために必要になったサラリーＳＡＬＡＬＹという言葉は、大切なもの、それがなければ生きていけないものという意味で、語源は塩ＳＡＬＴだといっている。それほど塩は重要なもの。聖典や故事のなかには塩について多くのたとえ話が語られているし、宗教儀式でお清めのためには塩を用いるのよ。

　ところで、もうひとつ驚いたことには、細胞学者が「細胞には細胞外液があってその細胞外液は海水とほとんど同じ成分」と言っている。すごいね。あなたやママの体を包んでいる水分は実は海水だったんだね。なんとなく海がなつかしくなるね。海に行くと「人間が人間らしくなる」という言葉の意味がわかるような気がするね。海に行くと、素晴らしい本当のあなたが生まれてくるに違いない。。。さあ、家族みんなで海に行こう。強く逞しく心美しく育ってね。

編集後記

2015年は終戦後70年。日本が生まれ変わり飛躍する年です。しかし世界も日本も収拾のつかない危機的様相が色濃くなってきています。平和国家日本も世界平和への責任を果たす国として更に脱皮成長しなければならない時を迎えていると思います。そしてその鍵は海に囲まれた日本の真価を新たに見出すことにあることを、編集を通してスタッフ一同実感いたしました。「日本の盛衰が決まる運命の年2015年」という危機感の下、各位様からの暖かい真心に励まされて創刊号発刊にこぎ着けました。何かと不足な点ばかりですが、今後読者の皆様に育てられ愛される雑誌として成長していくことができれば幸いです。宜しく願いいたしま～す。（佐藤・城間・松本・丸山・峰尾・他編集スタッフ一同）

投稿募集

6月3日発刊第2号から読者の皆様より投稿を募集。海に関する経験・随想・絵画・写真・詩や短歌・俳句など。採用の折は記念品を贈呈。
お問合わせ/送り先　kaiyoushinjidai@gmail.com　TEL 045- 228-9274

（ご協力：宮城県慶長使節船ミュージアム・サンファン館／北海道奥尻島奥尻町　グラビア写真提供：梅宮　表紙：Mycks）

PR

海洋真時代

vol 1

March 2015

特集

海洋政策の研究 提言 海洋政策13の柱

1000年に1度の地震津波に耐えうる「東日本復興政策」とは何か

2015年3月3日発行 季刊誌 創刊号
発行 雑誌「海洋真時代」
〒231-0851 横浜市中区山元町4丁目173-3-105
TEL 045-228-9274 kaiyoushinjidai@gmail.com

定価 300円

お問合わせ 045-319-4686 info@kaiyouheiwa.com
〒231-0021 神奈川県横浜市中区日本大通7番地 合人社横浜日本大通7ビル4階
㈱海洋平和 国民海洋基金局

ISSN 2189-3152